

平成 2 0 年 度

研 究 集 録

— 川越市教育委員会委嘱学校研究 —



川 越 市 教 育 委 員 会

あいさつ

川越市教育委員会教育長 山浦秀男

変化の著しい時代の要請に応えるべく、平成20年3月に新学習指導要領が告示され、平成21年4月からは、移行期間が始まります。各学校では、新しい教育内容の円滑な実施に向けて、着々と準備が進められているところです。

さて、新学習指導要領に引き継がれる「生きる力」を子どもたちに身に付けさせるための方策が、今回の改訂で明らかになってきております。OECDのPISA調査などの国際的な調査研究の成果から、習得した知識・技能を活用して課題を解決するための主要な能力（キー・コンピテンシー）である思考力・判断力・表現力を身に付け、探究活動の充実を図ることが「生きる力」を支える確かな学力の育成につながる、とされております。また、活用する力は、体験に基づいた言葉や非言語で表出され、このような表現力・コミュニケーション能力は、国語科を中核としながらも、全ての教科で養うべき能力であることが明示されました。併せて、自らを律しつつ他人を思いやる心などの豊かな人間性、たくましく生きるための健康と体力を育むための具体的な取組も求められております。そして、「生きる力」をはぐくむ教育において問われているのは、子どもたちの能力だけではありません。教育する者の力量、それを支える社会の底力が問われてきております。

このような中、平成20年度川越市教育委員会委嘱の各学校研究が、大きな成果を上げ、ここに「研究集録」として刊行されることとなりました。それぞれの学校が、今日的な教育課題はもとより、自校の児童生徒の実態から課題を的確に把握した上で、研究主題を設定し、全職員一丸となって真摯に研究に取り組まれました。心から敬意と謝意を表すものであります。委嘱学校研究2年次の7校につきましては、学校の特色を生かした研究成果が発表され、「生きる力」の育成に向け、多くの示唆を与えてくださいました。1年次の4校につきましては、新学習指導要領の趣旨を受け、先進的な研究を推進しております。

ここに紹介された学校研究の成果が、多くの学校で指導内容や指導方法の工夫・改善に積極的に活用されることを期待しております。

結びに、委嘱研究に携わってこられた各学校及び地域・保護者の皆様の御尽力と、御指導くださいました関係各位の御厚意に対し、改めてお礼申し上げ、あいさつといたします。

目 次

(学校名)	(研究主題)	(ページ)
【2年次】		
泉小学校	「互いの思いや考えを伝え合うことのできる児童の育成」 －国語科の学びを中核として－	…… 1
月越小学校	「主体的に生きる力を身に付ける児童の育成」 －思考力を高めるためのコミュニケーション能力の育成をめざして－	…… 5
高階北小学校	「学ぶ喜び 笑顔輝く 高北っ子」 －豊かに学び合う算数科の学習活動を通して－	…… 9
高階西小学校	「子どもが生き生きと活動する算数科指導法の工夫・改善」	…… 13
寺尾小学校	「児童一人一人に確かな読みを身に付けさせる指導法の工夫」	…… 17
大東東小学校	「生き生きと活動する児童の育成」 －のびた・できた喜びを味わえる体育科指導法の研究－	…… 21
霞ヶ関東小学校	「認め合い、分かり合う心豊かな児童の育成」 －「伝え合う力を育てる場」を大切にした学級活動の実践を通して－	…… 25
【1年次】		
中央小学校	「心身ともにたくましい児童の育成（体育科）」 －仲間とともに鍛える心と体－	…… 29
仙波小学校	「算数大好き！仙波っ子」の育成 －学び合いを中心にした指導法の工夫改善－	…… 33
霞ヶ関北小学校	「コミュニケーション能力を育む授業の創造」	…… 37
南古谷中学校	「活力ある学校づくり」 －学年や学級が独自性を発揮しやすくするため、 話し合いが充実できる学年会議の設定－	…… 41

研究主題

「互いの思いや考えを伝え合うことのできる児童の育成」

— 国語科の学びを中核として —

川越市立泉小学校

研究のポイント

- 「互いの思いや考えを伝え合うことのできる児童の育成」を目指し、
- 国語科を中核に「聞く力・話す力・話し合う力」に重点を置き、言語活動を中心にした、授業づくりを実践し、コミュニケーション能力を培う。
 - よりよい人間関係の構築を目指し、心を育てる場・伝え合う力の実践の場として道徳の授業の充実と特別活動における話し合い活動や異年齢集団の活動の充実を図る。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

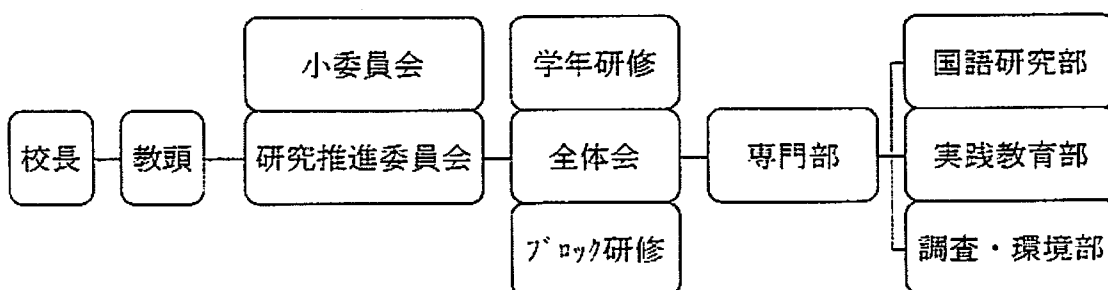
コミュニケーション能力、伝え合う力は、技能（言語力）の側面と、心の側面の2つを実践していく中で高まっていくと考え、国語科で主に技能（言語力）の習得を、道徳で心を育み、特別活動で行動面を教えていくことで、「互いの思いや考えを伝え合うことのできる児童の育成」をねらいとした。

(2) 研究主題設定理由

本校の児童の実態を見てみると、優しい気持ちを持って行動することができ、とても素直であると言っている。反面、自分の思いを言葉で伝えることが苦手で、相手に伝えるための技能を十分に身に付いていないために、自分の気持ちがうまく伝えられず口ごもったり、感情的な行動を取ってしまったこともある。

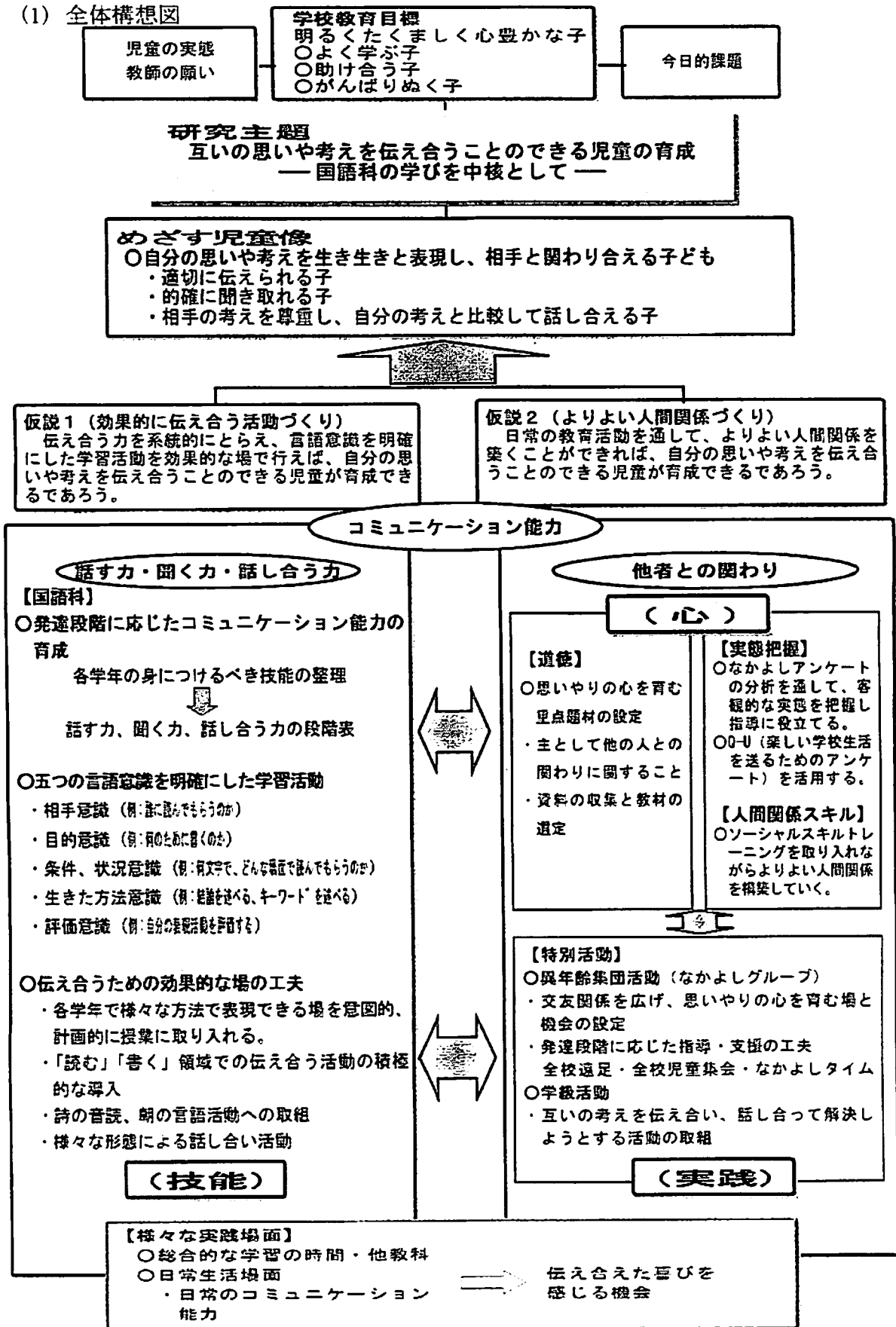
そこで研究主題を「互いの思いや考えを伝え合うことのできる児童の育成」し、国語科を中核に研究を進めていくこととした。目指す児童像を「自分の思いや考えを生き生きと表現し、相手とかかわり合える子ども」とし、適切に伝えられる子、的確に聞き取れる子、相手の考えを尊重し、自分の考えと比較して話し合える子を具体像とし、主題に迫ることとした。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 全体構想図



(2) 研究仮説

〈仮説1〉(効果的に伝え合う活動づくり)

- ・伝え合う力を系統的にとらえ、言語意識を明確にした学習活動を効果的な場で行えば、自分の思いや考えを伝え合うことのできる児童が育成できるであろう。

〈仮説2〉(よりよい人間関係づくり)

- ・日常の教育活動を通して、よりよい人間関係を築くことができれば、自分の思いや考えを伝え合うことのできる児童が育成できるであろう。

3 実践事例

(1) 仮説1(効果的に伝え合う活動づくり)

- ① 国語科で身につけたいコミュニケーション能力を系統的に考えるための系統表の作成により、発達段階に応じた指導を目指した。

国語科で身につけたいコミュニケーション能力		1・2年生	3・4年生	5・6年生
話し方	対話	相手に分かるように、順序に従って話すことができる子 ・良い姿勢で発表や発表ができる。 ・「はいーです。」のような基本的な挨拶を使って話すことができる。	相手に分かるように、意図を全て述べて話すことができる子 ・相手の目を見て話すことができる。 ・相手や目的に応じて、ていねいな言葉づかいで話すことができる。	目的や意図が分かるように、的確に話すことができる子 ・話す相手や目的、場によさわしい適切な言葉づかいで話すことができる。 ・相手の反応を見ながら話の進め立てを工夫することができる。
	発表	ことばの順序に従って話すことができる。 ・話す相手や目的をはっきりして話すことができる。	理由をつけて話すことができる。 ・話をはっきりさせて話すことができる。	自分の意見や考えを理由をはっきりさせて話すことができる。 ・具体的な例を挙げたり、事実と意見を区別したりして、自分の考えを分かりやすく話すことができる。
	朗読	授業中の発表の声が全員に聞こえる。 ・音読の声が、声のものを「る」の声で発表できる。	相手の目を見て話すことができる。 ・適切な音量や速さで話すことができる。	目的や場に応じて、聞き手を意識した声の大きさを話すことができる。 ・目的や場に応じて声の強さを考えて話すことができる。
聞く力	対話	相手の話を最後まで聞くことができる子 ・先生の話を最後まで聞くことができる。 ・発表している友達の方を向いて、さながらながら聞くことができる。	話の中心に従って聞くことができる子 ・相手の方を向いて、静かに最後まで聞くことができる。 ・あいつもを待ちながら聞くことができる。	相手の意図をつかみながら聞くことができる子 ・相手の考えに対して、反応しながら聞くことができる。(うなづきや表情) ・話し手の方を向いて最後まで静かに聞くことができる。
	発表	大事な言葉を落とさないように聞くことができる。 ・のあてに添って聞くことができる。	質疑応答や発表表現に従って聞くことができる。 ・自分の考えと比べながら聞くことができる。	相手の考えの良いところや改善点を意識して聞くことができる。 ・相手の考えと自分の考えを比べながら聞くことができる。
	朗読	自分の考えを聞き、話し合うことができる子 ・友達の意見を最後まで聞いてから、自分の考えを言うことができる。	自分の考えと比べながら、進んで話し合うことができる子 ・相手の考えのよいところを見つけて話し合うことができる。 ・「まとのよう」という挨拶をもって話し合うことができる。	互いの考えの良さを認め合いながら話し合うことができる子 ・相手の考えを尊重しながら話し合うことができる。
話し合う力	対話	友達の話を聞いて感想を言うことができる。 ・友達のスピーチについて質問することができる。	話に対して、自分の考えをもって話し合うことができる。 ・自分の考えとの相違点や共通点を考えながら話し合うことができる。	自分の立場をはっきりさせて話し合うことができる。 ・相手の考えに付足したり、反論しながら自分の考えが述べることができる。

- ② 相手意識、目的意識、条件・状況意識、方法意識、評価意識、の5つの言語意識を明確にした学習活動を効果的な場の工夫により行うことで、育成を図った。

伝え合うための効果的な場の工夫

掲載した作文の読もうし
本のゲームボードで話し合う
少人数グループでの話し合い

(2) 仮説2(よりよい人間関係づくり)

- ① 日常生活で身につけたいコミュニケーション能力を系統的に考えるため

の系統表の作成により、発達段階に応じた指導を目指した。

日常生活で身につけたいコミュニケーション能力

	Ⅰ - 自己表現	Ⅱ - 会話能力	Ⅲ - 円滑性
自己表現	自分の気持ちや考えを相手に伝えることができる。	相手の気持ちや考えを聞き取ることができる。	相手の気持ちや考えを聞き取ることができる。
会話能力	相手の話を聞きながら自分の話をすることができる。	相手の話を聞きながら自分の話をすることができる。	相手の話を聞きながら自分の話をすることができる。
円滑性	相手の話を聞きながら自分の話をすることができる。	相手の話を聞きながら自分の話をすることができる。	相手の話を聞きながら自分の話をすることができる。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・身につけるべきコミュニケーション能力を明確にすることによって、子どもたちが適切に話したり的確に聞き取ることができるようになってきた。
- ・教師が5つの言語意識を念頭に入れ、授業の工夫をすることができるようになり、子どもたちがいろいろな考えや意見を認められるようになってきた。
- ・伝え合う場を工夫することにより、子どもたちが意欲的に活動をすることができるようになってきた。
- ・小グループによる話し合い活動を取り入れたことで、多様な考えが出され、意見を交換することができた。
- ・日常生活におけるコミュニケーション能力を整理することによって、様々な場面で伝え合う力を育むことができた。
- ・なかよしアンケート、Q-Uは、学級集団の実態や児童個人を把握し、それぞれに応じた手立てを考えることができた。
- ・ソーシャルスキルトレーニングを計画的に取り入れることにより、温かい人間関係が醸成されてきている。
- ・異年齢集団での活動の場と機会を設定し、発達段階に応じた指導・支援を積み重ねたことにより、活動への意欲が高まり、助け合い協力し合える人間関係が育ってきている。

(2) 課題

- ・国語科で身につけた伝え合う力を他教科をはじめ、実践的な場面で活用できるよう、継続的に研究を進めていく。
- ・効果的な場の工夫(適した形態・場面・時期)を年間計画に位置付け、意図的、計画的に実践していく。
- ・児童に伝え合うことよさを実感させ、意欲的に取り組ませることで、引き続き伝え合う力を深めたり広げたりしていく。
- ・よりよい人間関係を作るための的確な実態把握と実態に応じた段階的なソーシャルスキルトレーニングを実践していく。
- ・道徳・特別活動の指導の充実を図り、よりよい人間関係づくりへの基盤づくりを強化していく。

研究主題

「主体的に生きる力を身に付ける児童の育成」

－思考力を高めるためのコミュニケーション能力の育成をめざして－

川越市立月越小学校

研究のポイント

- コミュニケーション能力の定義を共通理解し、思考を深めるための支援の場や方法を明確にする。
- 研究の柱である「指導」「場」「評価」について、学習活動における児童の思考の流れを明らかにし、各教科等の具体的な手立てを明確にする。
- 単元構想図を作成し、学習内容の系統性や指導のポイントを明確にする。
- 学習に集中して取り組めるように学習環境の整備や基本的な生活習慣の定着を図る。

1 研究の概要

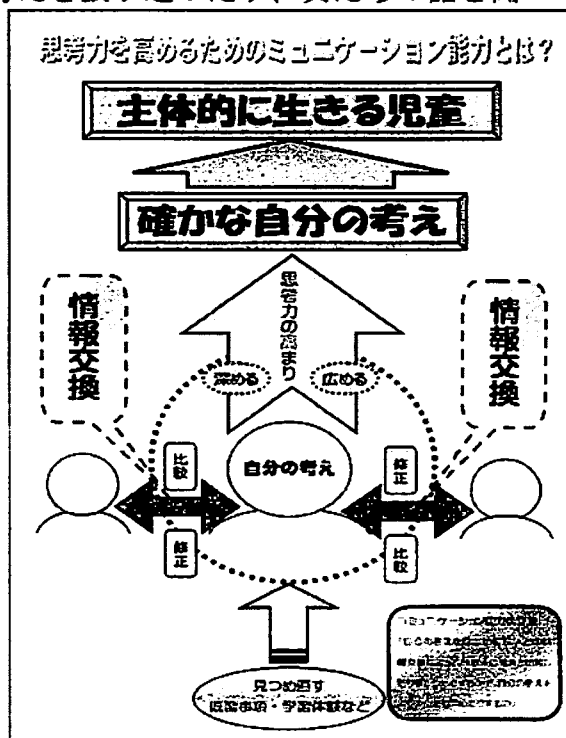
(1) 研究のねらい

- ①確かな学力の定着を図るために、思考力が高まるような学習指導の工夫改善に取り組む。
- ②思考力の高まりを的確に評価し、指導に生かす方法を研究する。
- ③学習規律や生活のきまりやマナーなどの基本的な生活習慣の充実を図る。

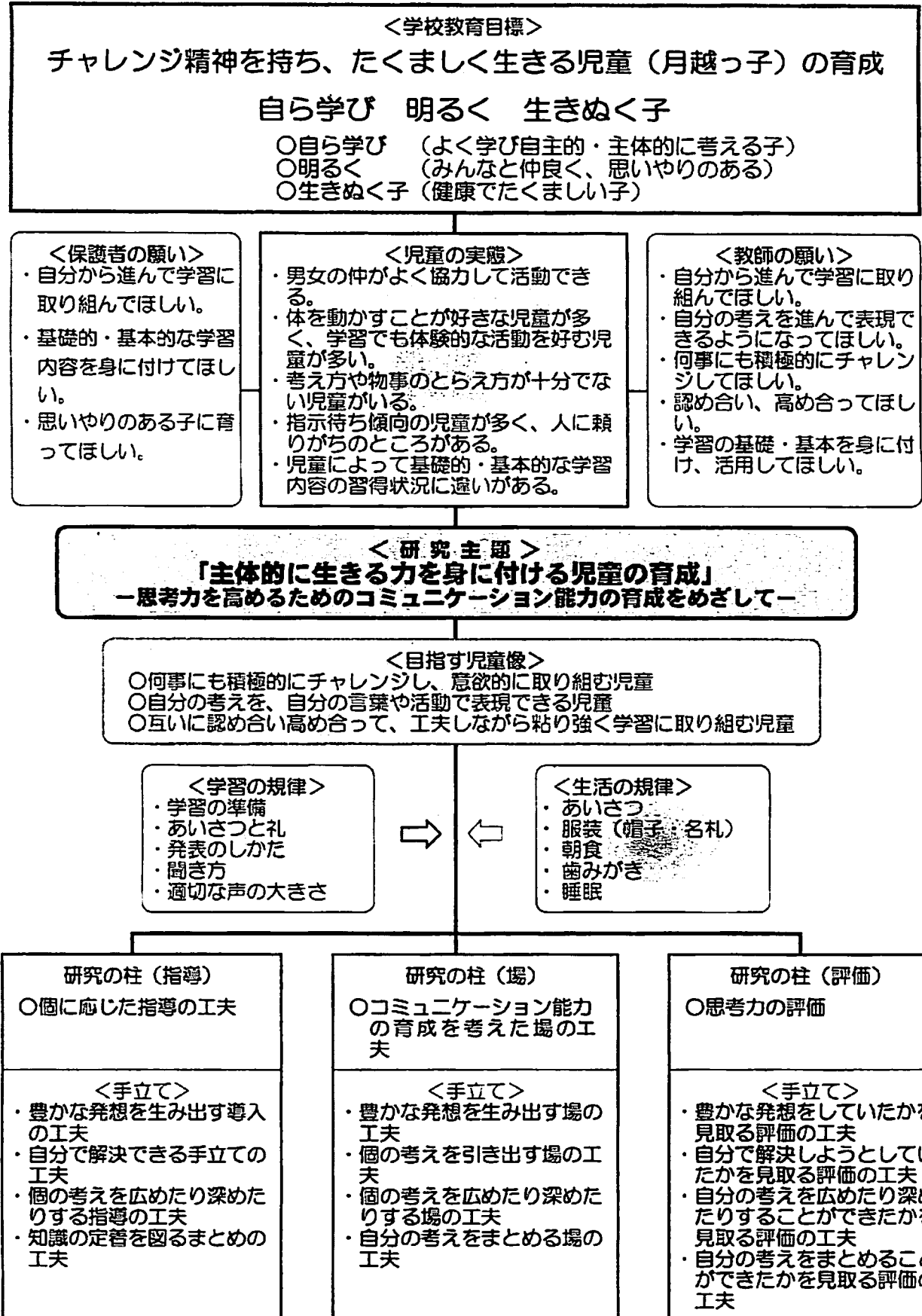
(2) 研究主題設定理由

本校の児童は、素直で元気がよいが、生活全般で考え方や物事のとらえ方に消極的な部分がある。また、学習を主体的に進めたり、自分の思いや考えを表現したりすることを苦手とする児童も見られる。特に、自分の考えを振り返ったり、友だちの話を聞いて自分の考えを広めたり深めたりせずに安易に結論を出したがる傾向がある。

そこで、アンケート調査等を行い、児童の実態、保護者の願い、教師の願いを明らかにし、児童に今、何を育てていけばよいか教職員で話し合い、児童一人一人が自分の考えを持ち、友だちや先生とのかかわりから自分の考えを深めていくことが必要であると考えた。そして、①児童一人一人が自分の考えを持つ。②児童一人一人がコミュニケーションしながら、友達のと考えと比べて自分の考えを修正する。③児童一人一人が自分の考えを深めたり、広めたりすることができるように、「思考力を高めるためのコミュニケーション能力の育成」を目指すことにした。



2 研究の内容
 (1) 研究の全体構想



3 実践事例

(1) 授業実践

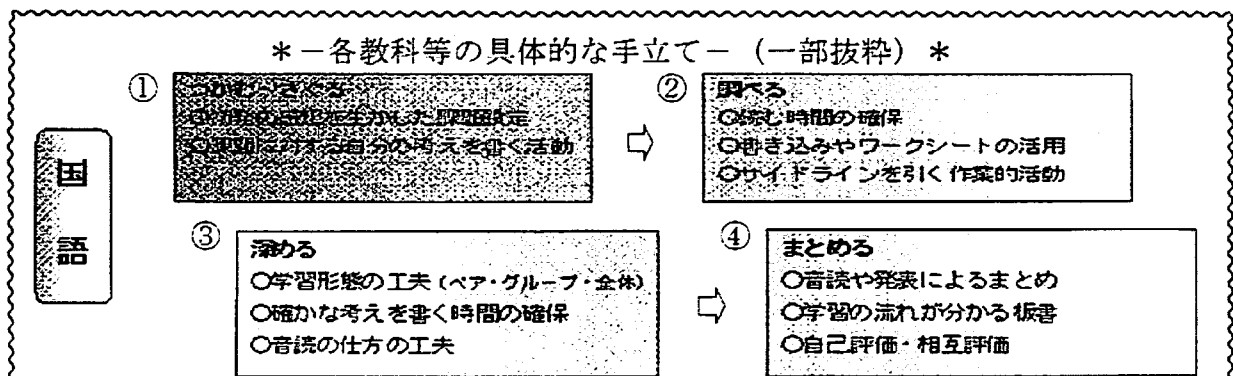
<p>■平成20年7月7日(月)第4学年 授業者 原田敬武 山崎紀子 梅田敬章 算数 「記録を見やすく整理しよう」 ○指導者 川越市立教育研究所指導主事 横山 敦子先生</p>
<p>■平成20年9月29日(月)第5学年2組 授業者 吉田麻美 理科 「てんびんとてこ」 ○指導者 川越市立教育研究所指導主事 中村 健二先生</p>
<p>■平成20年10月14日(火)第3学年1組 授業者 早川智文 国語 「ちいちゃんのかげおくり」 ○指導者 川越市立教育研究所主査 宮崎 宣男先生</p>
<p>■平成20年10月21日(火)第2学年 授業者 道祖土 茂 内田陽子 橋本陽子 算数 「かけ算(1)4のだんの九九」 ○指導者 川越市立教育研究所指導主事 横山 敦子先生</p>
<p>■平成20年10月23日(木)第1学年1組 授業者 吉田久美子 国語 「くじらぐも」 ○指導者 川越市立教育研究所主査 宮崎 宣男先生</p>
<p>■平成20年11月17日(月)第6学年1組 授業者 三角久美 社会 「新しい日本、平和な日本へ」 ○指導者 川越市立教育研究所指導主事 内野 博紀先生</p>
<p>■平成20年11月20日(木)菊組 授業者 福岡二郎 三橋寿美子 藤田嘉洋 生活単元 「レストランへゴー！」 ○指導者 本校校長 田邊 佐久代先生</p>
<p>■平成21年1月15日(木)菊組 授業者 福岡二郎 三橋寿美子 藤田嘉洋 生活単元 「買い物に行こう」 ○指導者 川越市立教育研究所教育相談担当主査 浅見 由利子先生</p>

(2) 各教科等における具体的な手立て

思考力を高める手立てとして、研究の柱を3つ設定した。

- ①「個に応じた指導の工夫」《指導》
- ②「コミュニケーション能力の育成を考えた場の工夫」《場》
- ③「思考力の評価」《評価》

月越小としての基本的な学習の流れ「つかむ→調べる→深める→まとめる」に沿って研究の柱の手立てを考えたことで、各教科等の具体的な支援方法が明らかになり、日々の授業実践が各ねらいに迫るものとなった。その結果として、さらに思考力を高める授業展開を図ることができた。



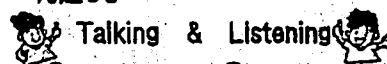
(3) 学習環境の整備

充実した学習活動を展開するために学習規律の確立をめざし、全学年で取り組んだ。また、生活の基盤となる基本的な生活習慣が定着するように、生活アンケートの実施・分析を行い、生活リズムの確立に取り組んだ。さらには、保護者との連携により、側面的な支援がなされ、集中して学習に取り組めるようになった。

—学習規律の共有—

- 1 読むときははじめて手を上げ、読み終わったら「はい」という返事をし、いすを机の中に入れて立つ。
- 2 話を聞くときには、手を机の上におき、話し手のかたを向く。口で、目で、心で話を聞けるようにする。
- 3 授業が終わったら、次の授業の準備を机の上にし、休み時間にやる。
「自立」
「これで、0時間目の授業が終わりにします」
「礼」
「次の授業の用意をしよう」
- 4 友だちを呼ぶときは名前（「さん」「くん」）を付けて呼ぶ。
- 5 時と鐘に合った声の大きさを使い分ける。

月越つ子



㊦ たわぶ声 ㊦ かんて聞く

㊦ れいな発音 ㊦ 気持ちをくむ

㊦ ひをはつきり ㊦ 感て聞く

㊦ がおを忘れず ㊦ がおてうなすく

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- 全教職員がコミュニケーション能力の定義を共通理解したことで、児童の思考を深めるための支援の場や方法が明確になった。
- 研究の柱である「指導」「場」「評価」について、学習活動における児童の思考の流れを明らかにすることで各教科等の「具体的な手立て」が明確になった。さらに、これらの手立てを活用し、日々の授業実践を積み重ねることによって、各教科等のねらいに迫り思考力を高める授業展開を図ることができた。
- 単元構想図を作成することで、学習内容の系統性や指導のポイントが明確になり、個々の児童へ、ねらいに沿った適切な指導や支援・評価を行うことができるようになった。
- 研究教科等を国語・社会・算数・理科・生活単元学習にしたことで、各教科等の特色を生かした指導方法が明確になり、各教科間の関連性も見えてきた。
- 学習に集中して取り組めるような学習環境の整備に取り組んだことで、児童は落ち着いた態度で意欲的に授業に臨めるようになった。
- 基本的な生活習慣の定着を図るため、アンケート等の考察を通して実態把握を十分に行うことで、適切な生活指導をすることができた。また、生活面では保護者の協力を得ながら児童の生活が改善されてきた。さらに、「あいさつ小道」「あいさつ広場」を中心に、気持ちの良いあいさつができるようになった。

(2) 課題

- 思考力の高まりや定着を判断する方法として、自分の考えを書かせたり発表させたりして、授業前と授業後での変容を見てきたが、より一層思考力の高まりが分かるような方法を工夫していきたい。さらに、コミュニケーション能力の向上に向けた具体的なスキルを明確にし、思考力を高める方法を追究していきたい。
- 基本的な生活習慣の更なる定着を図るために、今後も児童の実態を十分に把握し、保護者と協力しながら指導に取り組んでいきたい。
- 今年度は、国語・社会・算数・理科・生活単元学習において研究を進めてきた。研究の成果を生かすために、今後は他教科等へ研究を広げ、深めていきたい。

研究主題

「学ぶ喜び 笑顔輝く 高北っ子」
～豊かに学び合う算数科の学習活動を通して～

川越市立高階北小学校

研究のポイント

- 教師の指導力を高め、学校全体の教育力を向上させるための「一貫した指導」
- 子どもたち一人一人に「確かな学力」を育成するための指導内容の重点化と指導体制の確立
- 「豊かな学び合い」を実現させるための練り上げ指導の明確化

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

① 目指す児童像

- ア 進んで学習に取り組む子
- イ 既習を生かし、自らの考えで解決しようとする子
- ウ 自分の考えをもとに友だちと考えを高め合う子

② 研究仮説の設定

〔仮説1〕

「もとなる考え」を重点化した授業づくりを行えば、一人一人に確かな学力を育成できるだろう。

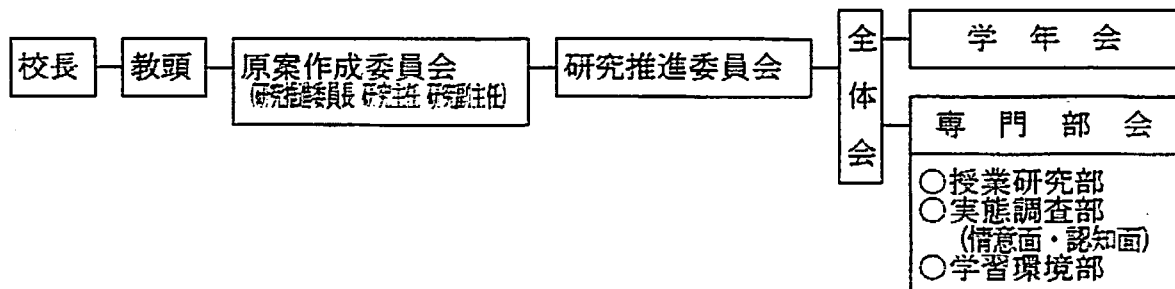
〔仮説2〕

視点を明確にして練り上げ指導を行えば、豊かな学び合いを実現できるだろう。

(2) 研究主題設定理由

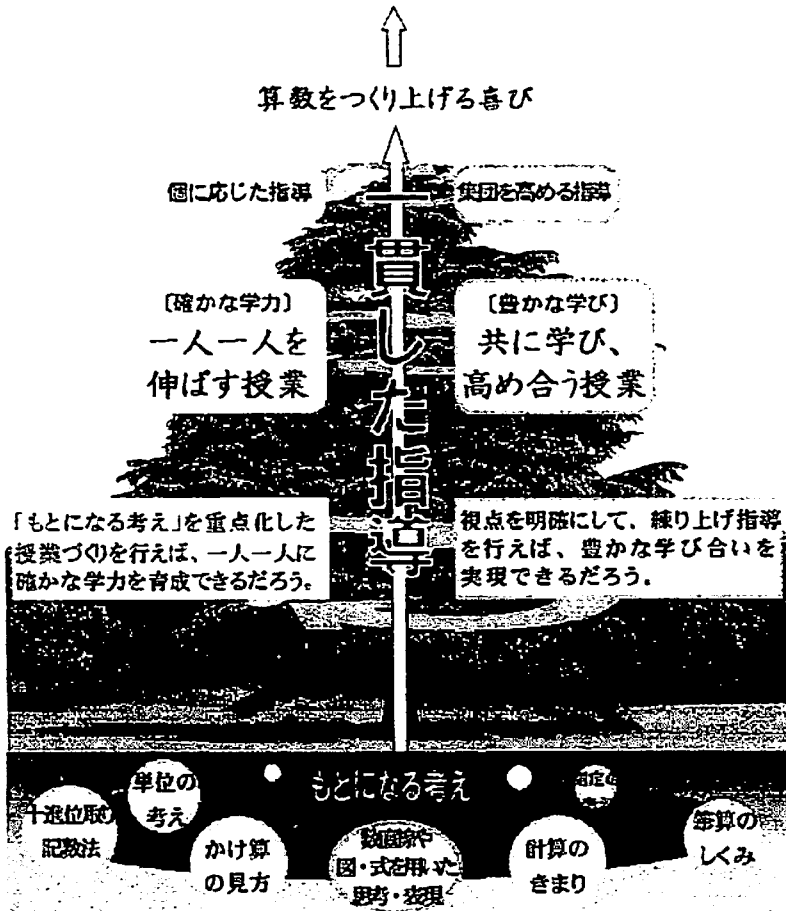
実施が目前となった新学習指導要領では、「生きる力」をはぐくむという理念が継承され、理数教育のこれまで以上の充実が求められている。本校では、平成16年度以降算数科の学校研究に取り組み、本校教育課題の改善を図ってきた。その結果、校内での共同歩調が進められ、特に学習過程については、日々の授業で実践されている。しかしながら、子どもたちを個別に見た場合、課題を抱えたままの子がどの学級にもいる。また、お互いの考えを発表し、高め合う授業作りを目指した場合、課題は残ったままとなっている。さらに、年ごとに期待が大きくなる保護者の思いを真摯に受け止めることも不可欠である。これらを改善し、学校教育目標「たくましく かしこく なかよく」を具現化するために本研究主題を掲げ、2年間の委嘱研究に取り組むこととした。

(3) 研究組織



2 研究の内容（学校研究グランドデザインより）

学校教育目標の具現化
たくましく かしこく なかよく



「豊かな学び合い」
の実現のために

「豊かな学び」とは、自力解決で得たことを生かして、練り上げの場面で児童が互いに認め合ったり、高め合ったりする学びである。

練り上げの意義の再確認

- ①新しい学習内容が既習事項をどう組み合わせる構成されたのかを知ることができる
- ②友達との解決と比較することで、自分の解決の修正、洗練、関連付けができる
- ③互いに表現し、伝え合うことで、学習集団として価値を共有し、高め合うことができる

具体的方策と継続的な実践


- 練り上げの視点の明確化 (は・か・せ 他)
- 考えを表現する場の工夫 (ペア、小集団 全校 等)
- 児童の実態に応じた教師の関わり方の見極め

3 実践事例

「一貫した指導」として、次のような7つの取組を校内での共通理解のもと継続的に進めた。

(1) 教科書解説型の授業から問題解決型の授業へ

日々の算数学習の積み重ねの中でこそ、自ら課題を見付け、自ら学び考える力は伸びていくと考えた。

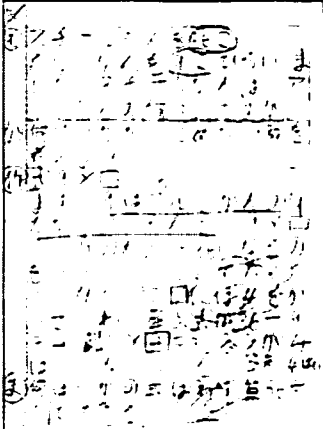


そのために、子どもたちがじっくりと考える時間を保障し、新しい知識を既習事項と関連付けて獲得していく授業に切り替えていく必要がある。算数学習の基本として、これを全学年全学級で同じように進めた。

(2) ノート指導の統一

学習過程に応じて①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺など、ノートの書き方を年度当初にしっかりと指導する。

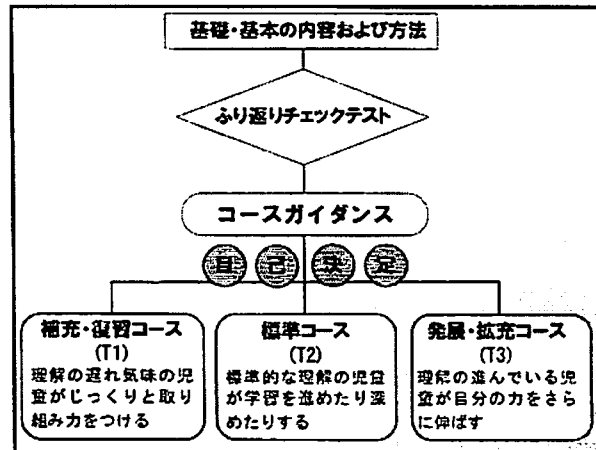
本時の課題を明確にし、自分なりの計画を立てるとともに、自力解決の時間には、自分の考えを自由に記述できる力が育成された。



(7) 効果的な少人数指導

一人一人に応じるために

これまでの算数指導の反省をもとに、子どもたちの学習状況に応じるための効果的な少人数指導のあり方を検討した。学級を単純分割する方法を見直し、児童の実態に応じた学習活動を行うコース別学習を進めた。高学年では、ほぼ全ての単元で継続的に行っている。また、低・中学年でも高学年を見据えて、自己決定能力の状況を見ながら、実態に合わせて積極的に推進している。



練り上げの活性化のために

練り上げ指導についても、学年や学習コースの子どもたちの実態に応じて、教師の関わり方について検討を重ねた。自力解決だけでなく、自分の考えを表現する場面でもできるだけ多くの子どもが活躍できるように細かな配慮を重ねて実践している。

	低学年	中学年	高学年
補充・復習コース	ペア学習	ペア学習 (教師主導)	ペア学習 (教師主導)
標準コース	↓	↓	↓
発展・拡充コース	全体での話し合い (教師主導)	全体 小集団学習	全体 小集団学習
		↓	↓
		全体 小集団学習	全体 (子ども主体)
		↓	↓
		全体	

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・算数が「好き」、「楽しい」と感じている児童が増えた。
- ・1年から6年まで問題解決型の授業を進め、統一性のあるノート指導、「かけ算の見方」や「数直線」を重点化した指導など共通理解をもって取り組み、その結果児童の力を引き上げることができた。
- ・色々な考えについて話し合い、高め合うことができるようになった児童が増えた。
- ・継続的な研修を通して、教師の指導力向上とともに、児童の算数の学力も向上してきた。また、算数科への取組が他の教科や生徒指導等へ波及し、学校全体に落ち着きが見られるようになった。

(2) 課題

- ・「もともになる考え」を重点化する授業を「数と計算」領域を中心に取り組んできたが、今後は他の領域に広げていく必要がある。
- ・現状の「練り上げの視点」をもとに、児童相互の話し合いをさらに活性化させる指導の在り方を追究する。
- ・これまでに作成した少人数指導対応の年間指導計画を「習得」と「活用」を視点に継続的に見直していく必要がある。
- ・研究後も算数指導の体制を維持し、児童の学力をさらに向上させる方策を明確にする必要がある。

「子どもが生き生きと活動する算数科指導法の工夫・改善」

川越市立高階西小学校

研究のポイント

- 児童の実態に応じた指導や支援を行い、算数を学ぶ楽しさを味わわせる。
- 系統性を重視した指導を展開し、基礎・基本の徹底を図り、既習を生かして考える児童を育成する。
- 問題解決的学習を推進し、数学的な考え方を育てる。
- 算数についての意欲を喚起するための教材・教具・環境の整備を進める。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

系統性を重視した授業実践の中で、次のような児童の育成を目指す。

- 算数科の授業の中で生き生きと活動する児童
 - ・自ら進んで学習に取り組み、算数の学習を楽しむ子
 - ・既習事項を生かして、自分の考えをもてる子
 - ・考えのよさを認め合い、よりよい解決へと高め合う子

- ① 小集団指導や少人数指導などの在り方を検討し、個に応じた指導を行う。
- ② 系統性を重視した指導を行うために数直線対応図や計算のきまりを活用する。
- ③ 授業の始まりにスキルアップタイムを設定し、計算力等を高める。
- ④ 授業の進め方・ノートのとり方・話し合いの仕方などについて統一を図る。
- ⑤ 算数に興味・関心を持たせるための環境整備を行う。

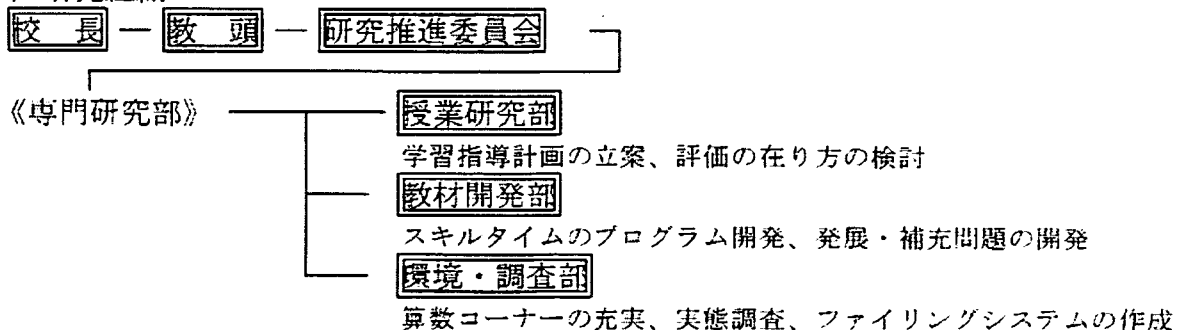
(2) 研究主題設定理由

現在、算数科では、「ゆとりの中で基礎・基本の確実な定着」「楽しさと充実感のある学習」「児童の主体的な活動の重視」が求められている。

本校の児童は、明るく子どもらしい気持ちをもつ反面、自分に対する自信が持てない児童が多い。特に、学習では算数に対する苦手意識が強い。確かに、入間地区算数学力調査や教研式学力検査の結果を見ても、学力が十分に備わっているとは言えない。また、思考力や表現力も十分でない。そのため、学年が進むにしたがって算数の学習に対して意欲的に取り組める子とそうでない子がはっきり二分化されている現状がある。

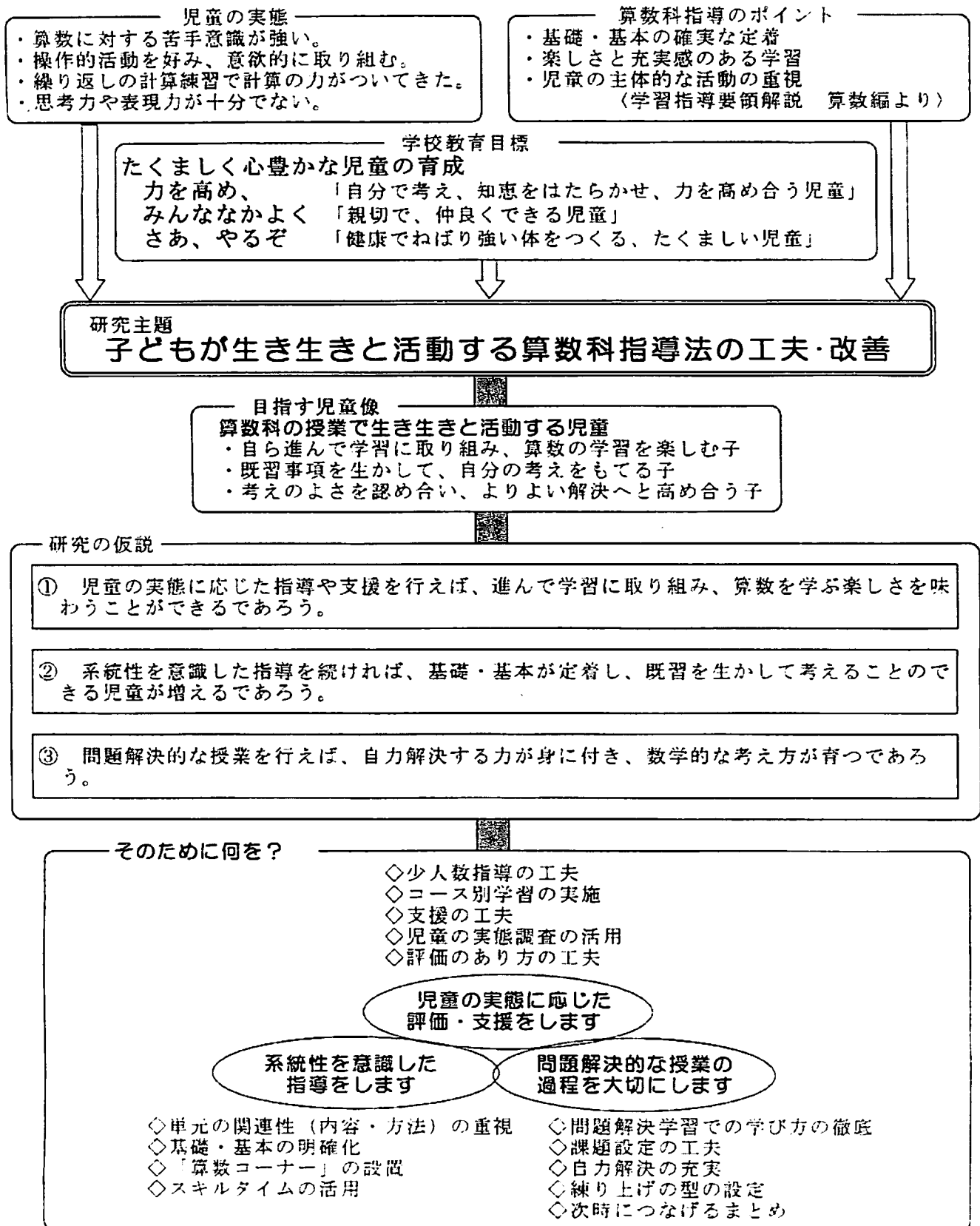
本校の児童に、生き生きと活動する算数科の授業を展開することは、算数の学力をつけるとともに、学校生活への意欲を高め、さらには、自分に自信をもち友達を大切にすることを育てることにも通ずると考え、本主題を設定した。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究構想図



(2) 専門部の取組

① 授業研究部

- ・ 指導案の形式作成
- ・ 発表の仕方、発表の約束、話し合いのポイントの統一 (各教室に掲示)

自分の考えを発表するとき

- 1 「発表を始めます。」
「はい。(全員)」
- 2 「わたしは～(〇〇作戦)で考えました。」
(説明する)
- 3 「質問はありますか？」
(質問し答える)
- 4 「発表を終わります。」
(かんばった友だちにはくす)

発表の約束

(指名されたら)

- ★ 「はい。～です。」
- ★ 「はい。～だと思います。」

(友だちの考えに意見を言う時)

- ★ 「同じです。」
- ★ 「ほかにあります。」
- ★ 「つけたしがあります。」
- ★ 「質問があります。」

話し合いのポイント

(互いの考えでよいところを見つけよう)

- ★ 「〇〇さんの考えは、前に学習した～を使っているのと同じです。」
- ★ 「〇〇さんの考えは～もしているの、わかりやすいです。」

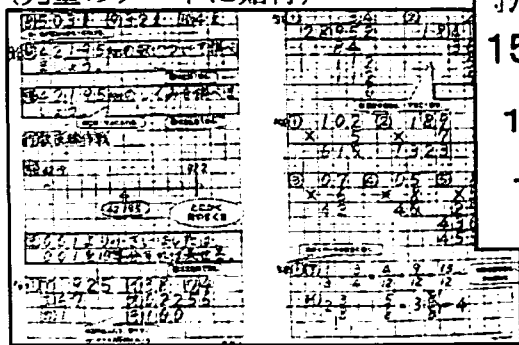
(互いの考えのよいところを見つけよう)

- ★ 「Aさんの考えとBさんの考えは～とこが、同じです。」

(いつでも伝えようという気持ちで)

- ★ 「Aさんの～の考えはついでに聞かせて。」
- ★ 「Bさんの～の考えを使って、次の問題をわけてください。」

- ・ ノートのとり方等の統一 (児童のノートに貼付)
- ・ 系統性を意識した指導



わり算の計算のきまり

1500 ÷ 500 = 3

150 ÷ 50 = 3

15 ÷ 5 = 3

商は等しい

数直線対応図の書き方

② 教材開発部

- ・ スキルタイムの計画とプリント作成
- ・ 授業始めの計算プリント作成

めざせ! くらげ

かけ算20問テスト

No. **38**

① 66 × 2 =

② 28 × 7 =

かけ算プリント 34

① × 2 = 18

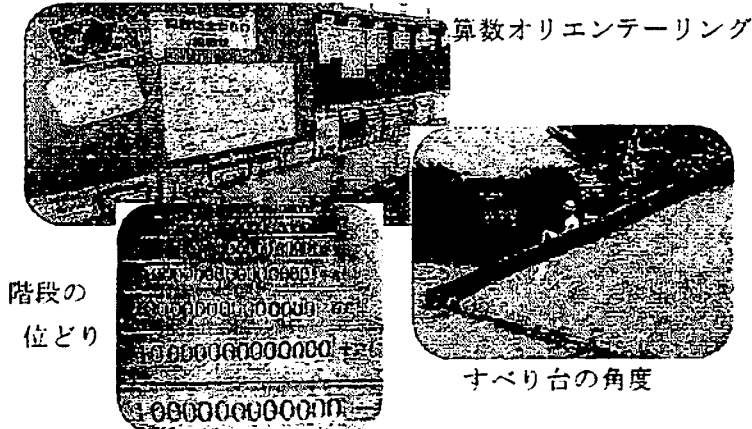
② 9 × 6 =

③ × 7 = 14

- ・ 授業支援教材の作成
- ・ 算数教材室の整備

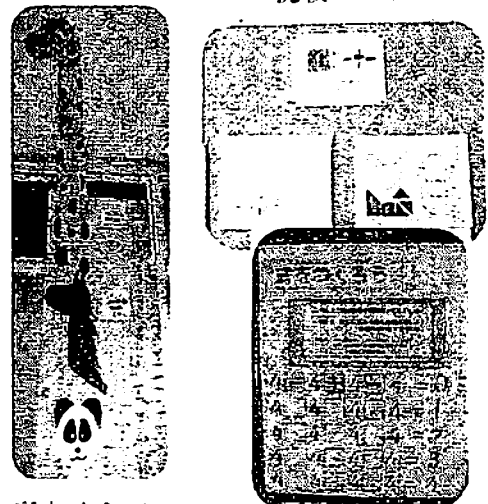
③ 環境・調査部

- ・ 校内の環境整備



- ・ 児童の実態調査 (アンケート)

挑戦コーナー



高さくらべ

3 実践事例 3年 新しい計算を考えよう [わり算]

平成20年6月23日実施

本単元の基礎・基本

- ① わり算の意味を理解する (等分除と包含除)
- ② わり算の計算の仕方を考える (かけ算との関連の重点化)
- ③ わり算の計算ができる

本単元の指導計画

わり算の意味・計算の仕方 (5時間)

学習内容の振り返り・チェックテスト (1時間)

コース別学習 (6時間)

わり算がっちりコース

- ・わり算の答えの見つけ方
- ・わり算の計算の習熟
- ・被除数が0, 被除数と除数が同じわり算
- ・何倍かを求めるわり算
- ・等分除と包含除の統合
- ・文章題, 問題作り

わり算ぼっちりコース

- ・わり算の計算の習熟
- ・等分除と包含除の統合
- ・被除数が0, 被除数と除数が同じわり算
- ・何倍かを求めるわり算
- ・問題づくり
- ・加減乗除の混じった文章題

まとめ・評価

本時の様子 (3/13)

ヒントコーナー



児童の解決



◇自力解決の充実

児童の発表



話し合い



◇練り上げの型の設定

4 研究の成果 (◎) と課題 (●)

◎研究を通して、算数を学ぶ環境や条件が整ってきた。

- ・個に応じた指導や支援を行ったり、単元の基礎・基本を踏まえて指導したりすることにより、児童に基礎的・基本的な学習内容が定着してきた。
- ・系統性を意識した指導を続けた結果、児童がこれまでに学習したこと (既習事項) を活用して意欲的に自力解決に取り組めるようになってきた。
- ・話し合いの約束・発表の仕方を統一し、教師が練り上げの構想をもって話し合いを進めることにより、児童の話し合いが充実してきた。
- ・ノート指導について共通理解を図ることで、1時間の学習の流れに沿ってノートをまとめられるようになってきた。また、学習を振り返る場を設定することにより、分かったことや感想等を自分の言葉で表現できるようになってきた。

●子どもが生き生きと活動する算数科指導法のさらなる工夫・改善に努める。

- ・基礎的・基本的な学習内容の定着のために、単元の指導計画の見直しやコース別学習の工夫などをさらに進める。
- ・問題解決的な学習の各過程での指導を充実させる。
- ・一人一人への適切な評価と支援の仕方を一層工夫していく。
- ・算数的活動を取り入れた指導について共通理解し、指導計画に組み入れていく。

児童一人一人に確かな読みを身に付けさせる指導法の工夫

「確かな読み」とは・・・

叙述に即して、内容や要旨を正しく把握しながら読むこと

川越市立寺尾小学校

研究のポイント

- 1 教師の指導力の向上を目指す。
- 2 研究のポイントを「確かな読み」に絞り、さまざまな手だてを開発する。
- 3 少人数指導やグループ学習等、学習形態を工夫して主体的な学習を目指す。
- 4 発達に応じた「育てたい読みの力」と、手だてとの関連を明確にする。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

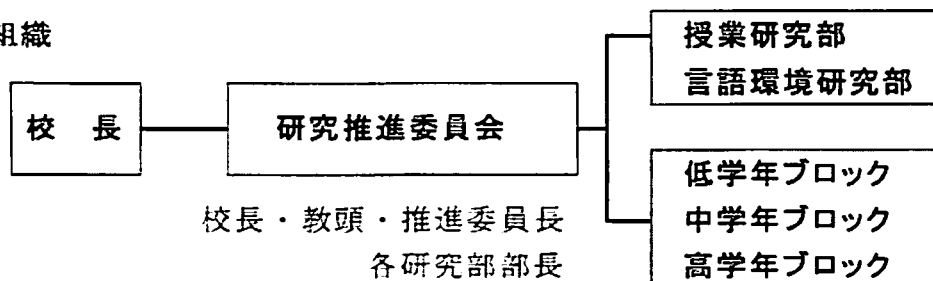
- ① 主体的に学習に取り組めるよう学習形態や指導法を工夫する。
- ② 学年の系統性をふまえた教材研究をし、継続的に取り組む場を設定する。

(2) 研究主題設定理由

「生きる力」、特に「確かな学力」とは、知識や技能はもちろんのこと、これに加えて、学ぶ意欲や自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力等まで含めたものである。本校では、そのすべてに通じる根幹的な能力として言語能力が重要であると考えた。

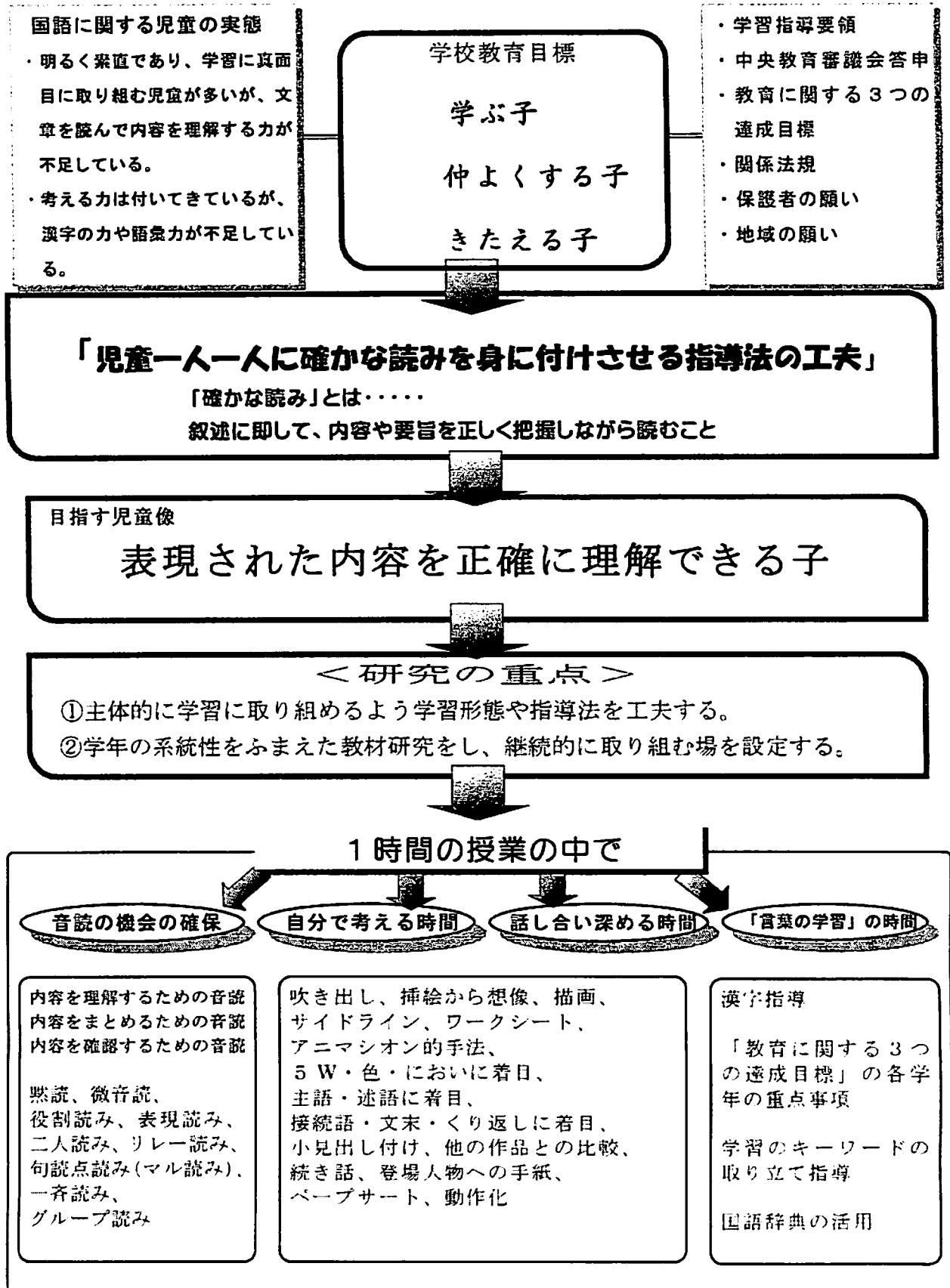
本校の児童は、明るく素直であり、学習に真面目に取り組む子が多い。また、学習課題を自らのものとし、意欲的に活動し、考える力も付いてきている。しかし、一方では、漢字の読みや、文章の読み取りが不十分なために、容易に学習を進めることができない児童の存在も明らかになってきた。そこで、要旨や内容を正しく把握して、文章をすらすら読むことができる児童の育成をすることが急務であると考えた。本校では、「叙述に即して、内容や要旨を正しく把握しながら読むこと」を「確かな読み」として捉え、研究主題を「児童一人一人に確かな読みを身に付けさせる指導法の工夫」とし、国語科の指導を通して確かな読みを身に付けさせることを目指して、本研究に取り組むことにした。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 全体構想図



3 実践事例

(1) 授業形式を整える

授業研究部を中心にして、1時間の授業の流れを整えた。授業のパターンができることにより、児童は学習の内容に集中でき、学習の手だても、授業の中に無理なく組み込むことが可能になる。

「言葉の学習」
最初もしくは最後に「言葉の学習」を行う。

学習課題
前時を振り返った後、学習課題を提示する。

音読
微音読、黙読など音読の機会を多くする。

自分で考える時間
吹き出しに書く、サイドラインを引くなど自分で考え、課題の解決を行う。

グループの話し合い、発表
グループでの話し合いをした後、発表する。

まとめ
まとめをして、音読などで発表する。

振り返り
振り返りカードに自己評価させ、次時につなげる。

(2) 学習の手だての具体例

① 音読の機会を多くする。

ア 微音読



イ 二人読み

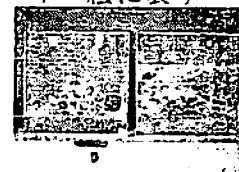


② 自分で考える時間を設ける。

ア サイドライン



イ 絵に表す



③ 話し合いで深める時間を設ける。

ア グループ



イ 全体



④ 「言葉の学習」の時間を設ける。

ア 漢字



イ 言葉の意味



(3) 言語環境を整える

掲示物を中心に、児童を取り巻く言語環境を整えた。

① 教室内

児童が主体的に学習に取り組めるように、教室の前面の掲示物を工夫した。これらは、6年間継続的に取り組むように、すべての教室に同じように掲示することにした。

例) 声のものさし 上手な聞き方 発表の仕方 等

② 校内

日常的に、言葉に対する関心を高めることができるような環境づくりを目指した。

ア 各学年の廊下に「国語コーナー」として、作文の書き方や比喻表現など学習したことを振り返ることができるコーナーを作った。

イ 登下校時に児童の目によく触れる「花の掲示板」に、季節に合わせた詩を掲示した。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- 少人数指導を取り入れたり、自分で考える時間を設けたりするなど、学習形態や指導方法を工夫することにより、主体的に学習に取り組むことができる児童が多くなってきた。
- 読みの系統を明らかにして、継続的に音読に取り組ませることにより、音読に関する関心が高まり、工夫して音読をする児童が多くなってきた。
- 1時間の授業の中に、「言葉の学習」の時間を設けたことにより、各学年の基礎的・基本的な事項を繰り返し指導することができ、意欲的に表現する児童が多くなってきた。
- 市立図書館の団体貸し出しを利用して、授業に発展読書を積極的に取り入れることにより、一人一人の授業中の読みが深まった。また、読書への関心も高めることができた。

(2) 課題

- △確かな読みを身に付けさせることを目指し、自分で考える時間における指導の手だてを工夫することはできたが、今後は、話合いや発表の場で一人一人の読みをさらに深めていく指導について工夫していきたい。
- △確かな読みを身に付けさせることへの指導やその評価について、研究を深めることができたが、さらにきめ細やかな指導方法、評価方法について研究を継続していきたい。

研究主題

「生き生きと活動する児童の育成」 ～のびた・できた喜びを味わえる体育科指導法の研究～ 川越市立大東東小学校

研究のポイント

- ・ 体育の授業を通して、子ども同士の関わり合いを工夫していくことで、仲間を思いやれる児童の育成を目指す。
- ・ 授業の工夫・改善を図り、評価方法を工夫することで、自ら進んで、粘り強く取り組む児童の育成を目指す。
- ・ 1単位時間の体育の授業の中で、運動量を確保することで、体力の向上と、基礎的・基本的な動きや技能を身につけた児童の育成を目指す。

1 研究の構想

(1) 研究のねらい

本校では、「やさしく」「かしこく」「たくましく」を学校教育目標に掲げ教育活動に取り組んでいる。この学校教育目標の具現化に向け、体育の授業では、以下のような児童の育成を目指し、体育科の研究に取り組んできた。

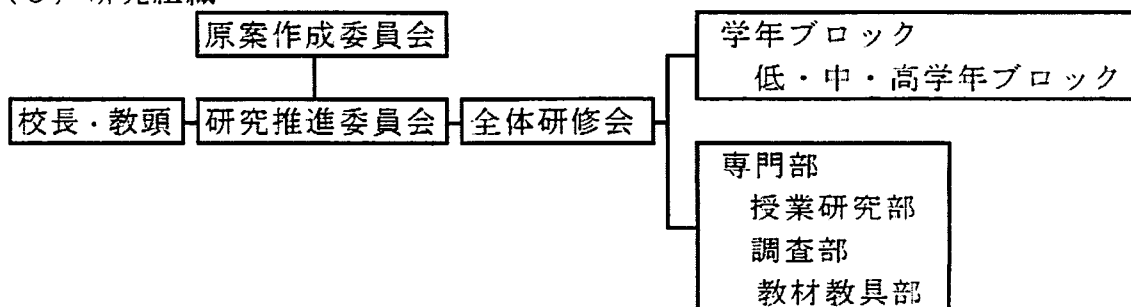
- ・ 仲間を思いやりながら、教え合い、励まし合いができる子
- ・ 自ら進んで運動に取り組み、粘り強く活動できる子
- ・ 楽しく運動し、基礎的・基本的な動きや技能を習得できる子

(2) 研究主題設定理由

本校の児童は、明るく、元気に活動し、外遊び等も進んで行う児童が多いが、仲間同士の関わり合いが上手に持てない、思いやりのある言葉がけが苦手等の傾向が見られた。また、目当てを持って、自ら進んで粘り強く取り組むことに課題がある傾向が見られた。

そこで、「生き生きと活動する児童の育成」～のびた・できた喜びを味わえる体育科指導法の研究～を研究主題に掲げ、体育科の授業の工夫・改善に取り組むこととした。

(3) 研究組織



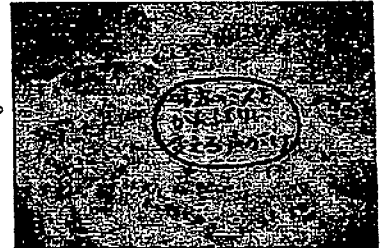
2 研究の内容

研究仮説 1

子ども同士の関わり合いを工夫することにより、仲間を思いやりながら、教え合い、励まし合いができる子が育つであろう。

- ・よい言葉がけや具体的なアドバイス、称賛の言葉を掲示し、子ども同士で教え合いや励まし合いができるようにする。
- ・個々の役割分担や約束を明確にし、協力して運動できるようにする。
- ・多様なグルーピングを行い、コミュニケーションの活性化を図り、多くの友達と関わり、仲良く運動できるようにする。

<よい言葉がけの掲示>



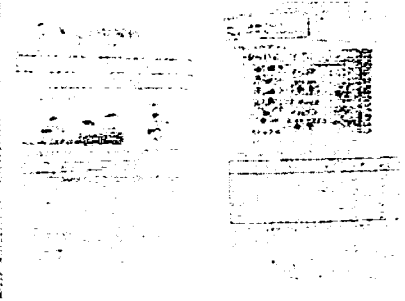
研究仮説 2

個に応じた評価方法を工夫することにより、自ら進んで、粘り強く取り組むことができる子が育つであろう。

- ・学習カードを活用することにより、めあてを明確にし、自己評価ができるようにする。
- ・動きや技のポイントを示し、児童が相互評価できるようにする。
- ・教師が補助簿、メモを活用し、適切な評価や助言を行う。



<運動のポイントの掲示>



<学習カード>

研究仮説 3

運動量を確保することにより、楽しく運動し、基礎的・基本的な動き、技能を習得することができる子が育つであろう。

- ・1時間の流れをシステム化し、効率よく授業を行うことにより、運動量を確保する。
(授業研究部 体育授業のシステム基本型参照)
- ・「すくすくプログラム」を取り入れた基礎感覚づくりやスキルアップのための練習時間を確保し、楽しく動きが身につくようにする。
- ・児童の実態に合わせて、運動の場やルールを工夫することにより、意欲的に運動できるようにする。
- ・補強運動を取り入れることで、身につけさせたい部位の力をつけたり、補ったりする。
- ・子どもが身につけるべき動きや技の系統を明らかにし、継続して指導する。

運動名 (飛び箱遊び・跳び箱運動)	系統性と必要な技能					
	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
基本動作	ふみこしとび 開脚跳び	飛越び 開脚跳び	開脚跳び			
基本動作	またぎこし 開脚跳び	うきとびはね 開脚跳び	かかえとび こみ			
基本動作		(マントの移動)	台上跳び		宙はねとび 跳はねとび	前方倒立回転 とび
本教材	ライオンとびら四	開脚跳び(1年5段階) ふみこし 1段階	開脚跳び(2-3段階)	開脚跳び(3-4段階)	開脚跳び(4-5段階)	開脚跳び(5-6段階)

<動きや技の系統表>

＜大東東小 体育授業のシステム基本型＞（1時間の授業の流れとその内容）

時間	学習内容	学習活動	指導上の留意点（○指導◆評価△努力を要する児童への手立て）
授業前	1 着替え 2 遊び・ゲーム等	○体育着に着替える ○鬼ごっこ・かみ踏み・馬跳び等々	○素早く着替える 丁寧にたたませる さちんと机の上ののせる ○隣同士で見合い、確認させる ◆着替えが素早くでき、服をさちんとたためる【関】 △教師が児童と共に手伝う ○遊びから入り、児童を集中させる（教師が遅れる場合は、活動内容を事前に伝え、児童に行わせる）
5分	3 準備運動	○3分間走 *体育館・・・短縄跳び等	○自分のペースで3分間走を行わせる（児童の実態を考慮して） ○全員一斉に行う（スタート位置を4カ所にし、混雑を避ける） ○学期始めと学期終わりに距離を測定し、伸びを確かめる ○リズム・テンポよく行う ◆自分にあった課題を持って進んで取り組もうとする【関】 △自分の力、記録（距離）を伸ばすことが大切なことを伝える
8分	4 基礎感覚づくり  ＜かえる倒立＞	○ブリッジ・かえるの足打ち・かえる倒立・補助倒立・布団干し・コウモリ・手押し車等（逆さ感覚） ○前かがり・後ろ転がり・横転がり・逆上がり・地球まわり等（回転感覚） ○スキップ・ギャロップ・ジャンプ・ケンケン・手足走り・おんぶ・馬跳び・ブリッジくぐり等（移動感覚） ○スキルゲーム等（ボール運動） ○すくすくプログラム 動物歩き・パービー運動・コンパス・バランスくずし 等	○リズム・テンポよく行う（リズム太鼓を使用） ○簡潔な説明と指示 ○8割くらい終わったら次へ進む ○二人組、三人組、男女等で行う運動を取り入れ、協力する場面を取り入れる（子ども同士の補助・声掛け・アドバイス） ○動きのポイントを押さえる 例）スキップはバンザイしたときに、両腕は耳の横 ○教師の声かけと評価を多く行う 例）「○回できたら合格です」「○君のブリッジがととても高い！」 ○上手な子、動きの良い子に示範をさせる
20分	5 主運動（課題に挑戦）  ＜バスをつなげて試合に勝つ！＞  ＜できたら次のステップに進もう！＞	C主運動を行う   ＜場の工夫＞	○学習カード等を活用し、個人・チームのめあてを明確にする ○学習資料で動き・技のポイントを示す（写真・イラスト） ○学習の場を確保・工夫し、運動量を確保する ○学習の場・用具を工夫し、子ども同士で行えるようにする ○補助の仕方・声かけの仕方等を教え、子ども同士の関わりを持たせる（広場の仕方・作戦の立て方・具体的な言葉かけの指示） ○多様なグルーピングを行う（チーム内の役割分担等を明確にする） ○教師は補助、個別評価、言葉かけ、助言を積極的に行う ○「生き生きと運動させるための3原則」 ①ゲーム化する ②競争化する ③課題を高める（スモールステップ）・・・成功体験を保障する ○「基本の運動の3原則」 ①無理なく（めあては高すぎず、低すぎず、頑張ればできるもの） ②無駄なく（調子よく動けるように、無駄な力を入れさせず） ③むらなく（左右両方行う 等） ◆自分の課題達成のために、自分の能力にあった課題や練習方法を選び練習を行っている【思】 ◆課題の「動き」や「技」ができる【技】 △一人一人に合った課題を選ばせる △動きや技のポイントを伝える
5分	6 振り返り	○本時を振り返る 「めあては達成できたか」 「友だちと協力できたか」 「次時に生かせることは何か」 「頑張った友だちにだれか」等	○めあてに対し、子どもの自己評価・相互評価を行う（学習カード等の活用） ○教師の評価を行う（良い面を褒める・褒め言葉は短く・子どもの伸びや努力を褒める） *補助解・メモの活用 ○短時間でを行う
3分	7 補強運動 	○補強運動を行う （体力テストの結果等から伸ばしたい力の向上を図るための運動を行う） 例）短距離走・パービー運動・補助倒立・シーソー、縄跳び等	○頑張っている児童を褒める ○最後まで粘り強く取り組ませる ○短い時間で集中して行わせる ◆進んで補強運動に取り組もうとする【関】 △教師は積極的に励ましの声をかける
4分	8 整理運動・後片付け・次時の予告あいさつ	○整理運動を行う ○後片付けを行う ○あいさつをする	○ゆったりとした動作で行い、心身を和らげる ○次時の予告をし、意欲付けを図る ○素早く、協力して後片付けを行わせる

■システムの基本型は上記を原則とするが、児童の発達段階、学習内容等で異なる場合がある。 ■時間はおおよその目安である。

3 実践事例

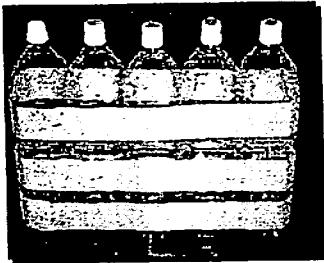
教材教具の作成

児童が生き生き取り組み、授業の効率化を図るために、以下のような教材教具を作成し、活用した。

作成した教材教具

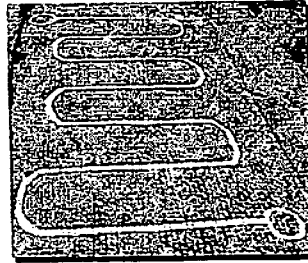
ペットボトルハードル

低学年の児童でも高さへの抵抗感を軽減できて安心して思いきって跳べる。準備や片付けが簡単に行える。



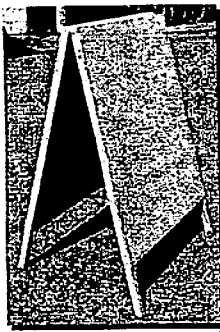
へびじゃんけんコース

ルールを守って楽しく遊べる。曲線をスムーズに走ることにより調整力も養える。



学習ボード

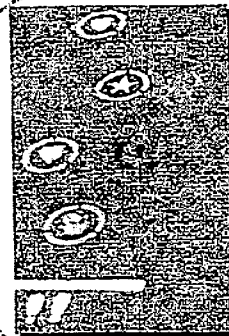
視覚的に学習内容を把握できる。



- ① 学習意欲の向上
- ② 運動量の確保
- ③ 関わり合える場の設定
- ④ 運動技能の向上
- ⑤ 安全の確保
- ⑥ 遊びの生活化

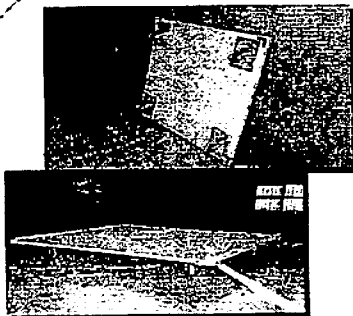
ケンパ遊びコーナー

友達同士の関わり合いが深まる。楽しみながら調整力が高められる。



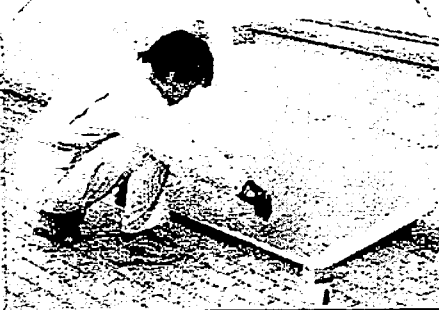
跳び箱カート

跳び箱の準備・片づけが安全にすばやくできる。



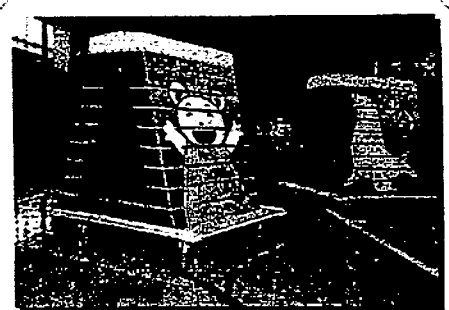
ジャンピングボード

跳躍時の滞空時間を長くして、二重跳びが容易にできる。



跳び箱へのペインティング

楽しい雰囲気の中で跳び箱を跳びすばやく片づけることができる。



4 成果と課題

- ・技のポイントを明確にすることで、子ども同士のよい言葉かけが活発になり教え合う姿が見られた。
- ・活用しやすい学習カードや資料の提示により、子ども同士の適切な相互評価がなされた。
- ・授業をシステム化することにより、運動量を確保し、学習意欲、基礎技能、体力が向上した。
- ・子どもに身に付ける基礎的・基本的な技能を明確にして、系統的に指導できるような年間指導計画をさらに充実していきたい。

研究主題

「認め合い、分かり合う心豊かな児童の育成」

－「伝え合う力を育てる場」を大切にした学級活動の実践を通して－

川越市立霞ヶ関東小学校

研究のポイント

- 学級活動の指導方法の研究
- 学級活動の事前・事後活動での児童との関わり方の研究
- 話し合い活動における支援の仕方

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

「伝え合う力を育てる場」を大切にした学級活動の実践において、仲間を思いやりながら、生活の問題をよりよく解決しようとする心豊かな児童を育成する。

(2) 研究主題設定の理由

① 児童の実態から

本校で平成18年度まで学校研究で取り組んできた「教育の関する3つの達成目標」の研究の成果として、道徳の時間や縦割り集団での活動の中で、自分の考えを発表したり討論したりする力が身に付いてきた。

さらに、課題を自ら見つけ主体的に取り組む力を身に付けるとともに、お互いに認め合う人間関係を構築し話し合いの中でうまく折り合いのつけられる児童に育ててほしいという願いがあった。

② 今日的な課題から

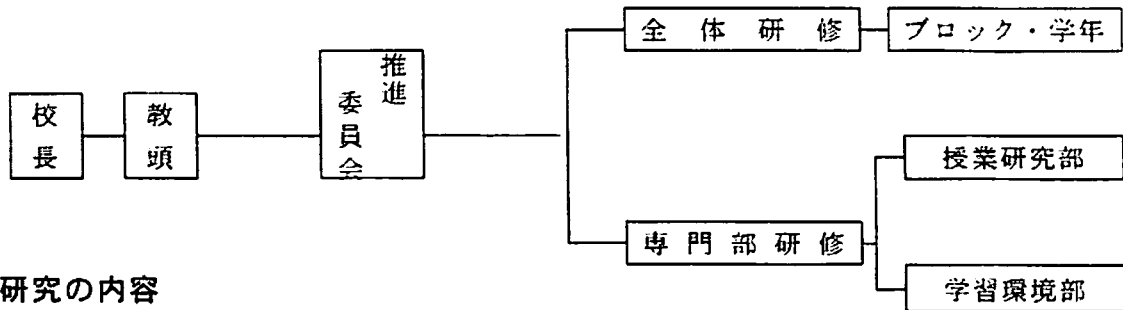
年々児童の社会性について、危惧されてきている。

本校でも、人間関係づくりに課題のある児童が年々増えてきたり、ささいなことが原因でのいさかいが多くなってきている。これは、コミュニケーションのとり方がよく分からなかったり、スキル不足であると思われる。

そこで、学校研究で「学級活動での話し合い活動」をとりあげ、お互いに認め合いながら尊重し合って話し合いを重ねることで、人間関係づくりも向上すると考えた。

私たちは、「人」と「人」との間で生きている「人間」であることを自覚し、自分の意思を伝えたり相手の気持ちをくみ取ったりするコミュニケーション能力の育成を図り、伝え合う力を養い、仲間を思いやりながら学校生活の問題をより良く解決しようとする心豊かな児童を育成しようと考えた。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究構想

研究構想図

社会的背景から

- コミュニケーション能力の育成
- 確かな学力と豊かな心の育成
- 社会の変化に主体的に対応できる児童・教員の育成
- 教育に関する3つの達成目標の推進

学校教育目標「太陽の子」

たくましい子

生き生きと活動する子

よく考える子

美しい心の子

児童の実態から

- 明るく、楽観的である
- 自分の課題解決に向けて努力をする
- 主体的な態度に積極的に取り組む
- 自分の思いや言葉を伝える力が不足している。

【研究主題】

認め合い、分かり合う心豊かな児童の育成

～「伝え合う力を育てる場」を大切にした学級活動の実践を通して～

【育てたい力】

- 自他を尊重する心情と思いやりの心をもって生活する態度
- 自分の思いや考えを進んで言葉で伝え、相手の思いや考えを理解できる力
- 自分たちの生活の課題に関心を持ち、解決したいという積極的な意欲
- よりよい解決に向けて取り組もうとする実践力や判断力

【目指す児童像】 互いを認め合いながら、よりよい学級・学校生活が実現するために、思いや考えを言葉で伝え、伝え合う子

【低学年】

みんなのことを考えて活動する子

【中学年】

進んで仲間とかがわり合い、力を合わせて活動する子

【高学年】

自分の思いや考えを進んで言葉で伝え、互いに認め合いながら活動する子

【研究の視点】

- 学級活動の文様・指導の追究
- 自分の思いや考えを言葉で発表し、みんなでよりよい解決を目指す話し合いの実践
- 自主的・実践的な活動が展開できるような学習環境の整備

【低学年】 友達とのかかわり合いの中で、みんなで協力することの楽しさを味わうことができる実践

【中学年】 友達とのかかわり合いの中で、互いに成長し達成感を味わうことができる実践

【高学年】 集団を意図したかがわり合いの中で、互いに成長し達成感を味わうことができる実践

(2) 研修経過 (20年度)

一 学 期	<ul style="list-style-type: none"> ・公開授業で、前年度までの研究で共通理解してきた指導方法の確認を行った。 (研究主任の学級、指導案の共通化) ・研究の方針と進め方の全体研修会を重ねた。 ・専門部のめあてと活動を確認しあった。 <p>○授業研究会 4年(伊東学級) 「なかよし集会をしよう」 指導者 川越小学校 加藤法子先生</p> <p>○授業研究会 5年(嶋田学級) 「すっきり・さわやかミニ運動会の計画を立てよう」 指導者 川越小学校 植木玲子先生</p> <p>○授業研究会 1年(塩野学級) 「なかよし きらきら たいようかい をひらこう」 指導者 川越市教育研究所 森田恵指導主事</p>
二 学 期	<ul style="list-style-type: none"> ・夏季休業中から、指導案検討と研究紀要の原稿の検討を行った。 ・研究発表会に向けて 指導案の検討をブロックを中心に行い、授業研究部で広め合った。 研究紀要づくりを専門部で行い、推進委員会でまとめた。 資料集づくりを全職員で行った。 ・研究発表会 (10月28日) ・研究発表会の反省と、授業についての協議会を行った。
三 学 期	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度のまとめと2年間の研究のまとめを行った。 ・児童の実態調査を行い、変更について考察した。 ・来年度の研究についての話し合いを行った。

3 実践事例

発表会当日の指導案の一つを紹介します。

第15回 学級活動(話し合い活動)計画 平成20年10月28日(火) 第5校時	
議 題	『61プロジェクト』の内容を考えよう
提案理由	最高学年の折り返しとなる修学旅行では、クラスがよりまとまり自分たちの楽しい思い出をつくることができました。そこで、今度は、東小の下級生のためにできることを『61プロジェクト』として考えたいと思います。そうすれば、修学旅行のふりかえりでもまとめた“協力・助け合い”と“下級生のお手本になる6年生”を表すことができるし、下級生と仲良くなり卒業までの思い出を増やすこともできるからです。
役割分担	司会(Aさん) 副司会(Bさん) ノート記録(Cさん) 黒板記録(Dさん)(Eさん)(Fさん)
話し合いのめあて	下級生のために、自分たちでできるプロジェクトの内容を考えよう。
決まっていること	<ul style="list-style-type: none"> ◇5年生のために、サッカー大会の応援をする。 ◇『61プロジェクト』は2学期の学級活動の時間と休み時間に行う。 ◇決まったプロジェクトは実行委員に計画を立ててもらおう。 ◇全員が必ずどれか一つの実行委員になる。

話合いの順序	時間	気をつけること	準備
1. はじめの言葉	5分	・大きな声ではっきりと言う。	学級会 グッズ 名札 活動計画 掲示物
2. 計画委員の紹介		・みんなによく分かるように、自分の役割とめあてを言う。	
3. 議題の確かめ			
4. 提案理由		・話し合う目的が分かるようにくわしく言ってもらおう。	
5. 話合いのめあて		・一人一人のめあてを(Gさん)から発表してもらおう。	
6. 話合い 柱「どんなプロジェクトをするか」	35分	<ul style="list-style-type: none"> ・始めに決まっていることを確かめる。 ・話し合う時間を言い、意見がまとまるように協力してもらおう。 ・副司会は、名簿を使ってできるだけたくさんの人が発表できるように指名を工夫する。 ・発言は、理由をつけて言ってもらおう。 ・司会は、黒板の様子を見ながら進行する。 ・決め方は、賛成意見の多いものにしばってまとめていく。 ・黒板記録は、出された意見の理由も分かりやすくまとめて書いていく。 ・下級生のためになることか、仲良く交流できる活動かを考えて発表してもらおう。 	時計 賛成・反対 のマグネット 決定マーク ありがとう マーク
7. 決まったことの発表	5分	・大きな声で分かりやすく言う。	
8. ふりかえり		<ul style="list-style-type: none"> ・学級会ノートにふりかえりを書く。 ・今日の話し合いのがんばりマンを3～4人に発表してもらおう。 	
9. 先生の話			
10. 終わりの言葉		・司会が今日の感想を入れて言う。	

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- お互いの意見を尊重し合い、自分たちの学級や学校の生活をよりよくするために意欲的に考え、願いの実現に積極的に取り組む児童が増えた。
- 自分の考えを通すのではなく、まわりのことを考えて意見を出すことができるようになった。
- 様々な活動を通して、子どものよさを発見することができた。

(2) 課題

- ☆各教科・道徳・総合的な学習の時間との関連を図り、自分の思いを伝える力や自他を尊重する態度をさらに育てていく。
- ☆児童の自主的・実践的な活動を促すために、事前・事後の指導と評価を工夫していく。

研究主題

「心身ともにたくましい児童の育成（体育科）」
～仲間とともに鍛える心と体～

川越市立中央小学校

研究のポイント

- ◎知・徳と比べ体力面に課題のある児童の実態を捉え、体育の授業改善や環境整備、教育計画の改善などを通じて、児童の心身両面での体力向上を目指した研究である。
- 体育科の授業研究を中心に、教師の指導力の向上と学級経営の充実を図る。
- 朝の運動、休み時間の活動、学校行事などでも創意工夫し運動する機会を増やし、学校生活全体でも児童の体力向上を図る。

1 研究の概要

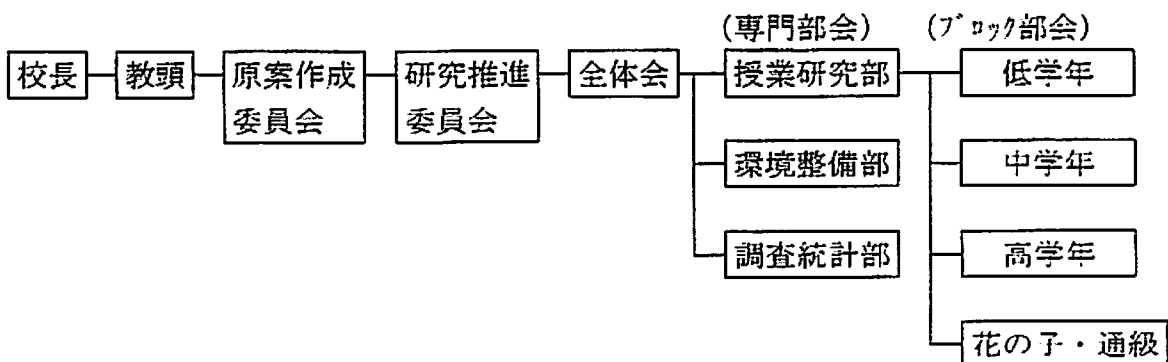
(1) 研究のねらい

- ①児童の体力向上を運動技能面だけでなく、心身の両面から育てていくことを目指す
- ②体育科授業の基礎基本を明らかにし、教師の指導力を向上させ、授業改善を図る
- ③体育科の授業成立の前提となる生活規律や学習規律を確立し学級経営の充実を図る
- ④児童が自ら運動に取り組むような環境の整備や教育計画の改善を図る

(2) 研究主題設定の理由

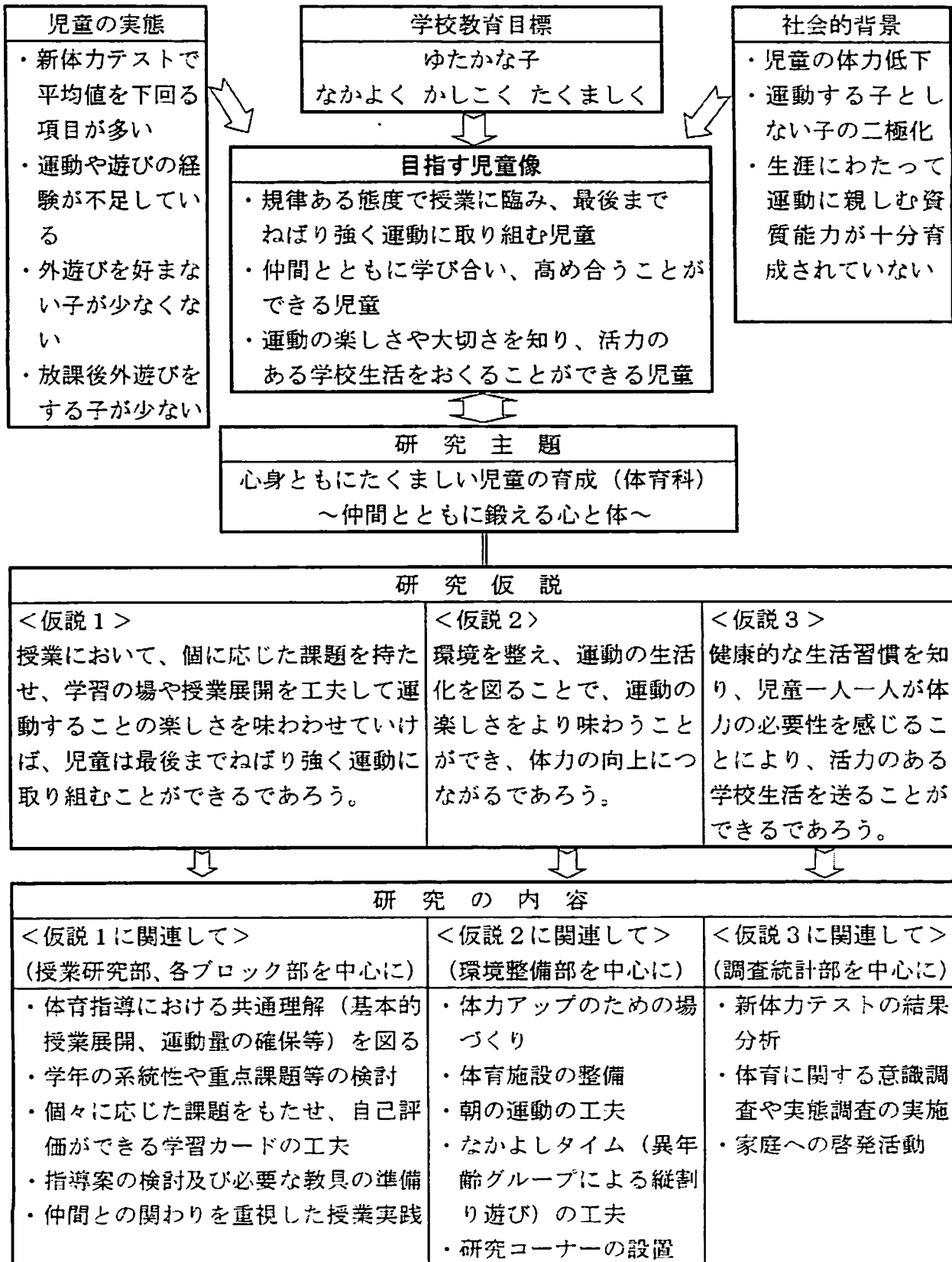
本校の学校教育目標は「豊かな子 かしこく なかよく たくましく」であり、「次代を担い、心豊かにたくましく生きる児童の育成」を目指している。これは、新学習指導要領でも目標とされている「生きる力」の育成に繋がるものである。一方、本校の児童の実態を振り返ると、全体的に素直で落ち着きがあり、各種学力調査などの結果ではどの教科も県平均を上回っている。しかし、新体力テストの結果ではどの学年も県平均を下回る種目が多く、体力面が本校の児童の課題となっている。また、精神面での未熟さから人間関係をうまく築けない児童も少なくない。学校教育において、人間関係を育てる基盤は学級である。体育科の授業を充実させることで、児童の体力の向上のみでなく、児童の精神面での成長や学級経営の充実も図れると考えた。そこで、研究主題を「心身ともにたくましい児童の育成（体育科）～仲間とともに鍛える心と体～」と設定し、体育科の研究に取り組むこととした。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究の構想



(2) 専門部の活動

① 授業研究部の取組

授業研究部では、本校の体育の基本的な授業の進め方の提案（示範授業実施）したり、研究授業に向けて指導案の形式や授業を見る視点の確認したりすることで、研究を進める上での共通理解を図った。また、全校児童一人一人が6年間を見通した「すくすくノート」を持ち、自ら課題を持った運動への取組や自分の成長や思いが積み重ねられるようにした。さらに、朝の運動（校庭、体育館）の内容も限られた時間を有効活用できるよう創意工夫を図った。

② 環境整備部の取組

環境整備部では、児童の体力向上のために以下のような取組を行った。

ア 体育施設の整備

児童も教師も使いやすいように体育施設等の整備を行った。

- ・ 体育小屋・体育館器具庫の整備・跳び箱、踏切版の整備
- ・ 用具の片付け方の表示作成（跳び箱の用具の片付け方を写真で掲示）

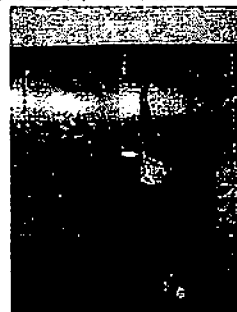
イ 体力アップのための場づくり（運動遊具の設置）

児童が楽しみながら体力をつけることができる遊具を新しく設けた。

ロケット投げ



チャレンジジャンプ



ウ なかよしタイムの実施

毎月2、3回、業間休みに異年齢グループによる縦割り遊び（なかよしタイム）を実施した。校庭や体育館での運動系の遊びもできるだけ多く取り入れ、ローテーションでいろいろな遊びができるように工夫した。

③ 調査統計部

調査統計部では、本校児童の体力に関する実態把握をするために以下のような取組を行った。

ア 新体力テストの集計と分析

イ 体育に関する意識調査（2回実施し変容を比較分析）

ウ 家庭への啓発活動（保健だよりや学校保健委員会等で調査分析結果を報告）

(3) その他の取組

本年度は体育研究に取り組む1年目ということもあり、先進校視察や外部講師を招いての理論研修、体育実技研修会などを数多く実施した。



3 実践事例 (第6学年の授業実践「体づくり運動」)

授業実践に関わる仮説

個に応じた課題を持たせ、授業展開を工夫して、仲間とともに楽しさを味わわせていけば、児童は最後までねばり強く運動に取り組むことができるであろう。

具体的な手立て 1

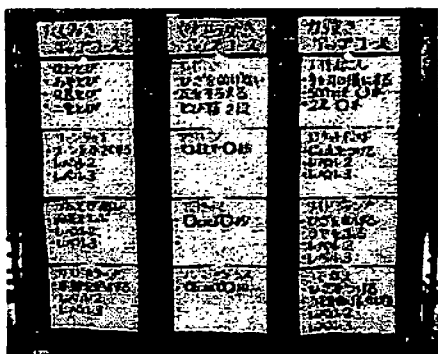
個に応じた課題を持たせるために

○新体カテスト結果の利用

- ・結果を分析し、自分に合った課題を設定

○自分の力の確認

- ・毎時間、学習カードに記録
- ・2人組で見合い、自分の力を把握



具体的な手立て 2

授業展開の工夫に関して

○場の工夫

- ・高めたい体力に合わせた運動の場の設定

○教材・教具の工夫

- ・運動の行い方や工夫の仕方がわかる資料提示
- ・自分の課題を明確にする学習カード

具体的な手立て 3

仲間との関わり合いを持たせるために

○学習形態の工夫

- ・二人組(ペア学習)やグループ、学級全体と学習形態を工夫し、仲間と関われる場面の設定



4 研究の成果と課題

(1) 成果

- 理論研修や研究授業に向けての指導案検討等を通じて、体育授業の基礎基本についての共通理解が図られ、日々の体育の授業の質も高まってきた。
- 授業の中で児童同士の教え合いや励まし合いなどの姿が多く見られるようになるとともに、持久走大会やなわとび大会などに向けて自主的に運動する児童の姿が多く見られるようになってきた。
- 体育に関する環境整備が進み、授業が効率的に進められ運動量の確保にもつながった。

(2) 課題

- 新学習指導要領に対応した新たな指導計画の作成
- 芝生などの自校の環境を生かした授業展開の工夫

研究主題

「算数大好き！仙波っ子」の育成 ～ 学び合いを中心にした指導法の工夫改善 ～

川越市立仙波小学校

研究のポイント

- ◎授業における児童相互の学び合いを通して基礎・基本の確実な定着を図り、学び方を学び、学んだことを活かして課題解決できる児童の育成。
- 自らの考えを伝え合う活動を通して、コミュニケーション能力を高め自己の存在感と自尊心の向上を図る。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

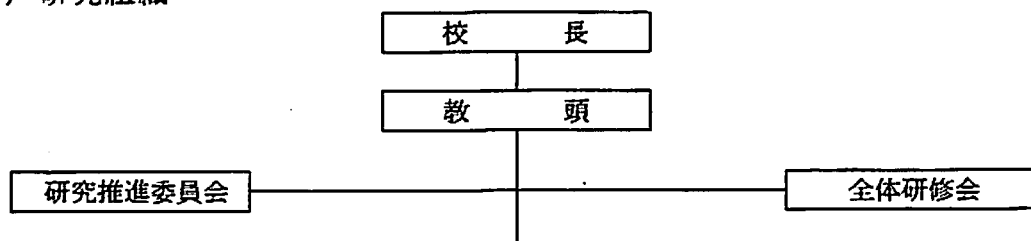
全員参加の話し合いによる学び合いを活性化していくことにより、意欲的に学習に取り組める児童を育成する。

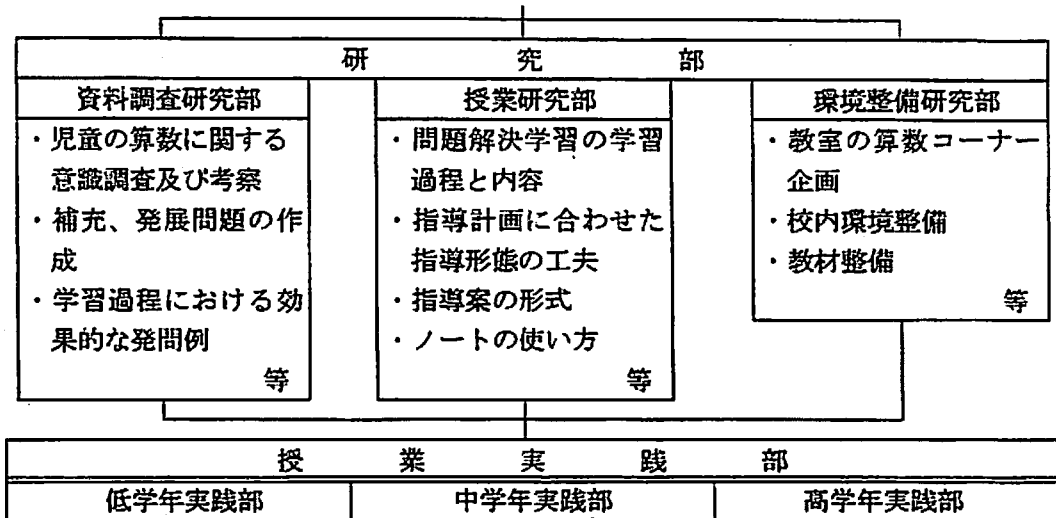
(2) 研究主題設定の理由

算数科の教科目標は、「数量や図形についての算数的活動を通して、基礎的な知識と技能を身に付け、日常の事象について見通しをもち筋道を立てて考える能力を育てるとともに、活動の楽しさや数理的な処理のよさに気付き、進んで生活に生かそうとする態度を育てる。」である。この目標を達成するために、問題解決的な授業実践が中心に行われているのは周知の通りである。問題解決的な学習過程は、問題をつかみ、自力解決後、全体で練り上げを行い、まとめていくという流れである。ただ、練り上げ段階では、ややもすると、発表者の話を聞くだけで、話し合いに参加できない児童も多かった。

そこで、本校の研究では学習の過程の様々な場面で、2人組や3～4人のグループあるいは学級全体で話し合う機会を意図的に取り入れていきたい。友達と考えを交流することにより、友達の良さを発見したり、逆に自らの良さに気付いたり、それらを通して自らを再構築しつつ、さらには友達と協同的に新たなものを生み出していく事ができるからである。このような学び合いを通して、算数好きな子が育成できると共に、コミュニケーション能力も育成できるものと考え。そしてそのことが算数の時間に限らず児童の存在感と自尊心の向上につながり「算数大好き」から「友達大好き」、「学校大好き」さらには「生きるの大好き」と実感できる児童の育成につながると考え本主題を設定した。

(3) 研究組織





2 研究内容

(1) 授業研究部

ア 問題解決学習の学習過程と内容

基本的には「①つかむ→②見通す→③解く→④話し合う→⑤まとめる」の学習過程で行う。ただし「④話し合う」は①～⑤の過程で必要に応じて取り入れていく。

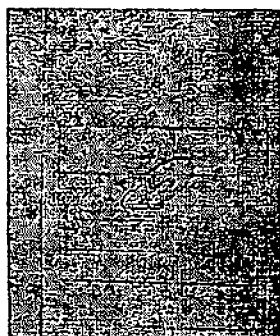
- ①つかむ……問題・課題（本時の問題場面や課題ををつかむ）
- ②見通す……既習事項をもとに、解決の計画を立てる・答えの見積もりをする
- ③解く……解決の計画をもとに、自力で問題解決をする
- ④話し合う…自分の解決方法を分かりやすく説明する
友達の解決方法を自分の考えと比べながら聞く
よりよい解決方法を見つける
- ⑤まとめる…本時の学習のまとめをする・適用問題を解く

イ ノートの使い方

日付	2センチくらいのところに線を引く		
	低 学 年	中 学 年	高 学 年
P	ページ数		
も	もんだい	問 題	問 題
か	か だ い	課 題	課 題
考	考 え か た	作 戦	見 通 す
と	と く	解 く	解 く
(話し合う)			
ま	ま と め	ま と め	ま と め
(適用問題)			

※ ていねいに書かせる。(ノートは参考書という意識付けを)
 ※ 誤字以外は消さない。(計算等の振り返りができる)

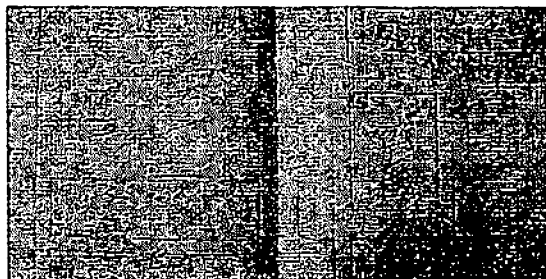
※ 線は定規を使って引く。(定規の扱いに慣れさせる)



自分の言葉でまとめよう

評価項目 楽・が・分
を◎○△で自己評価
楽 楽しんで できたか
が がんばれたか
分 分かったか

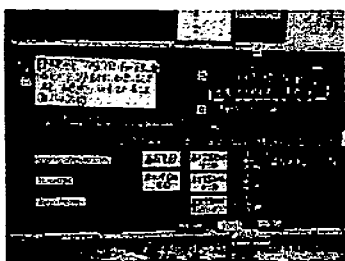
○ 問題→課題→
作戦(見通す)→解
く→まとめ
○ 課題やまとめを
自分の言葉でまと
める



考えた道筋が分かるノートに・・・

(2) 環境整備部

ア 学習過程のプレート作成



<今後の予定>

- ・屋外算数関係表示(角度・高さ等)の補修
- ・教室内「算数コーナー」プレートの作成

イ 校内算数掲示資料の手直し



チーターの走る速さやキリンの背の高さ
ゾウの足の大きさなどを掲示

(3) 資料調査部

- ・児童の実態(意識)調査内容の作成及び考察

<今後の予定> ・児童の実態(意識)調査内容の作成

3 実践事例

(1) 6月30日(木) 第5校時



中学年部会研究部授業

3年1組 小林真佐恵教諭 桐谷保治教諭

単元名「3けたの数の計算を考えよう」

指導者 川越市教育研究所 指導主事 横山敦子先生

- (2) 7月7日(月) 第5校時
 高学年部会研究部授業
 6年2組 伊藤 直任教諭
 単元名「比べ方を考えよう」
 指導者 川越市立寺尾小学校 教頭 福島正美先生



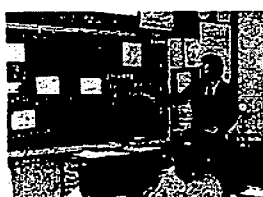
- (3) 9月30日(木) 第5校時 全体研究授業
 1年2組 奥富優子教諭
 単元名「ひきざん」
 指導者 川越市立川越西小学校 校長 大谷一義先生



- (4) 11月13日(木) 第5校時
 全体研究授業
 4年2組 今成恵美子教諭
 単元名「分けた大きさの表し方を考えよう」
 指導者 川越市教育研究所 指導主事 横山敦子先生



- (5) 12月 2日(火) 第5校時
 全体研究授業
 5年2組 伊藤秀輝教諭 田中照明教諭
 単元名「面積の求め方を考えよう」
 指導者 川越市立寺尾小学校 教頭 福島正美先生



- (6) 1月29日(木) 第5校時
 低学年部会研究授業
 2年2組 黒川和恵教諭
 単元名「1000より大きい数をしらべよう」
 指導者 川越市立川越西小学校 校長 大谷一義先生



4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・話し合う過程で自分の考えたことを相手に分かりやすく伝えるための工夫がみられた。特に低学年や中学年では積極的に自分の考えを伝えようとしていた。
- ・ノートの取り方や授業の進め方など学習の約束をどのクラスも同じように進めることによって見通しを持った取組ができるようになった。

(2) 課題

- ・話し合いを全体で行うのかグループで行うのか等話し合いの形態や授業のどの段階で取り入れたらよいか効果的な方法を今後検討していきたい。

研究主題

コミュニケーション能力を育む授業の創造

川越市立霞ヶ関北小学校

研究のポイント

- 基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を図り、学び方を学び、学んだことを生かして問題解決できる児童の育成
- 授業における児童相互の関わり合いを通したコミュニケーション能力の育成
- ペア学級制、オープン教室、少人数指導などのよさを生かすなど、個に応じた指導の充実

1 研究の概要

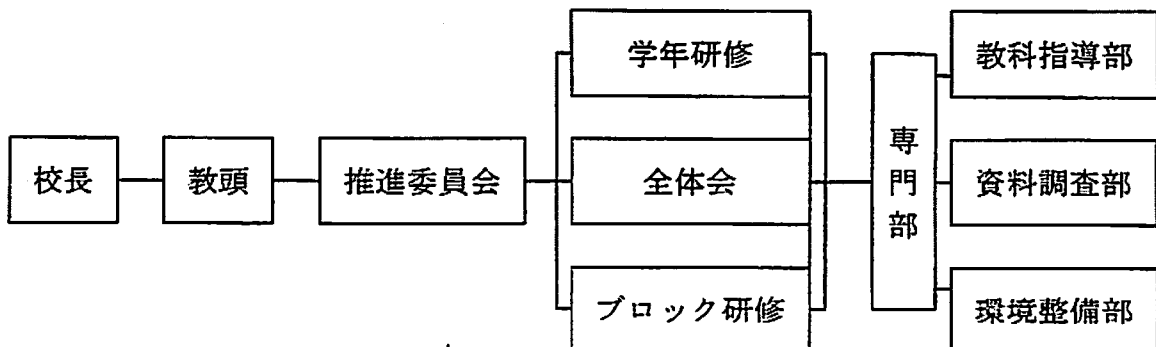
(1) 研究のねらい

本校では、算数科における「コミュニケーション能力」を、「数学的な内容を自己表現できる力」「他者とコミュニケーションできる力」ととらえている。本研究では、算数科の授業を通し、自ら課題をもち、考え、友達との豊かなかかわり合いを通して、問題解決していく児童の育成をねらいとした。

(2) 研究主題設定理由

本校は、平成18年度から「豊かな学びと授業の創造」をテーマに、国語科・算数科の研究に取り組んできた。その結果、児童に、標準学力検査・入間地区学力調査・教育に関する3つの達成目標検証結果において、各項目で平均を上回るなど、基礎学力の定着が図られてきた。また、授業での活動の様子を見ると、既習事項を生かして自力解決する力も伸びてきている。そこで、さらに研究を継続し、児童が相互の関わり合いの中で、活発に教え合ったり学び合ったりすることを通して、人間関係を深めながら学ぶ力を伸ばし、児童の生きる力を育てていきたいと考え、本研究主題を設定した。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究仮説

問題解決的な学習*を進め、子どもが学び合う場を工夫すれば、
コミュニケーション能力が育つであろう。

問題解決的な学習*とは、子どもが既習事項を生かし、様々な方法で課題を解決し、友達と話し合うことにより、よりよい解決方法を見いだす一連の学習過程

⇨(問題から課題を) つかむ→(結果や方法を) 見通す→解く→話し合う→まとめる→広げる⇩

(2) 目指す児童像

学年ブロックごとに、付けたい力について出し合い、目指す児童像をまとめた。授業研究会をはじめとする学校全体での研修会の際は、構造化シートを用い、ワークショップ型研修を実施した。付けたい力は、低学年「土台となる力」、中学年「問題解決力」、高学年「友達と関わる力」である。それらをもとに、以下のように目指す児童像を設定した。

高	中	低	意欲をもち、友達との*話し合いを通して問題解決していく児童
			自ら課題をもち、考え、友達との*学び合いを通して問題解決していく児童
			自ら課題をもち、考え、友達との*豊かなかわり合いを通して問題解決していく児童

***話し合い**：自分の考えを友達に分かるように表現し、友達の考えのよさを取り入れながら、自分の考えをさらに広めたり深めたりする。

***学び合い**：自分の考えが伝わるように表現したり、友達の考えを受け止めるように聞き、そのよさを自分の考えに取り入れながら、自分の考えをさらに広めたり深めたりする。

***豊かなかわり合い**：自分の考えを論理的に表現し、互いのよさを認め合い、友達の考えのよさを自分の考えに取り入れながら、自分の考えをさらに広めたり深めたりする。

(3) 問題解決的な学習

問題解決的な学習について、まず第1回授業研究会で問題解決の授業を公開した後、第3学年の単元について、実習を交えた研修を行った。その後、「算数における問題解決的な学習」について、川越西小学校長大谷一義先生に講演をしていただいた。「問題解決のプロセスを通して算数を学習させることにより、算数を創造的に学習させることができ、算数の内容の理解を深いものにする。」また、そのことにより、「知識体系の組みかえができる。」という問題解決的な学習の方法や意義、目的について教えていただいた。指導上の配慮など、具体的な方法についても、教えていただいた。また、学校全体でも取り組めるよう、学習過程を示した㊦、㊧などのカードを作成し、使用した。ノート指導やワークシートの研究も進められた。

(4) 基礎的・基本的な知識・技能の定着

まず、何が基礎的・基本的知識・技能にあたるか、学習指導要領の読み合わせから始めた。新学習指導要領の改訂点・指導内容の変遷についても研修会をもった。夏季休業中、埼玉大学教授金本良通先生に、新学習指導要領、算数におけるコミュニケーション能力について講演をいただいた。コミュニケーションの場の工夫について、多くの方法を具体的に教えていただいた。

また、学校全体の取組として、授業開始後1分30秒で計算をする「のびのびプリント」、各教室の算数コーナーの充実があげられる。各学年の基礎的・基本的な知識・技能の定着を、計画的に継続して実施する「のびのびプリント」は、自己評価を通して、できるようになった喜びも味わうことができる。算数コーナーは、学んだことをまとめていき、次時以降に生かせるものとした。

(5) コミュニケーション能力

コミュニケーションの場の工夫を、研究授業を通して追究をした。また、専門部を中心として研究が進められた。

① 教科指導部

問題解決的な学習の中でのコミュニケーション能力を具体的に洗い出し、表にまとめた。低・中・高別の発達段階をふまえ、自己や友達とのコミュニケーションについてまとめた。また、「発表の仕方、聞き方」の掲示物について、国語科との関連を図り、発表の仕方や聞き方についてまとめた。

研究授業前には、練り上げやコミュニケーションの仕方について、担当学年の教師を交えて話し合った。

② 資料調査部

アンケート調査。児童の情意面の調査やコミュニケーション能力の実態などを調査した。特に今年度は、項目の整理をおこなった。

③ 環境整備部

算数コーナーの設置や、課題学習室・会議室の掲示物を作成した。また、教科指導部の研究を受け、「発表の仕方、聞き方」の掲示物の作成をした。

3 実践事例

(1) 第1回研究授業全体研修会 第2学年 長さをはかろう「長さのたんい」

指導者 教育研究所指導主事 長井正邦先生

～ 一斉授業での、問題解決的な学習の進め方について ～

重点支援計画表や算数的活動を通して、個に応じた指導の充実を図った。研究会では、構造化シートを用いてワークショップ型研修を実施した。算数コーナーの重要性が話題になり、各学級に設置することとなった。課題として、「練り上げの言葉」の吟味があげられた。

- (2) 第2回研究授業中学年ブロック研修 第4学年 変わり方を見やすく表そう
指導者 高階北小 竹内一博 先生

～ 小集団で話し合い、発表 ～

今回の授業の形態は、少人数指導における問題解決的な学習であった。やり終わった児童や考えが思いつかない児童へ、ワークシートやヒントカードの用意がなされていた。

教科指導部会で「グラフが見やすくなるように、工夫してかこう」という課題の言葉について話題となり、話し合った結果、「グラフが見やすくなるように、目盛りの取り方を工夫してかこう」という言葉に変更された。前回の研究会では、練り上げの言葉が重要ということになったが、同様に「課題」の言葉も大変重要であることが分かった。

練り上げは、グループごとに発表し合い、その中から代表作を決めて全体で発表する形であった。

- (3) 第3回 研究授業全体研修会 第3学年 かけ算の筆算
指導者 川越西小学校長 大谷一義先生

～ ペアで話し合い、発表 ～

算数コーナーが充実し、児童の学習の助けになっていた。ワークシートも工夫され、たくさんの考えがよく書けていたし、既習として以前の学習も生かされていた。今回は、ペア学習をとり入れたが、たいへんよかった。(隣同士なので話しやすい。自信につながる。同じところを見つけやすい。質問の仕方や答え方が上手になってきた。話す中で、自分の考えが振り返られる。等)

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- 学校全体で、問題解決的な学習が行われるようになってきた。算数コーナーも充実し、既習を生かした学習が進められている。
- 授業の中で、意図的計画的に友達同士で交流する時間を設定したことにより、友達の多様な考えにふれ、自分の考えを広げたり深めたりするなど、豊かな関わり合いができるようになり、コミュニケーション能力が育ってきた。

(2) 課題

- 教師の言葉がけと児童の反応についての研究等、効果的な支援をより充実させる。
- 学年に応じた学び合い、話し合いを活発に行えるよう日々の授業を通して指導していく。
- さらに算数科の教材研究を進めていくことが必要である。

研究主題

「活力ある学校づくり」

—学年や学級が独自性を発揮しやすくするため、話し合いが充実できる学年会議の設定—

川越市立南古谷中学校

研究のポイント

- 学年の話し合いの時間を定期的に持ち、生徒の日常の生活について、いつも話し合えるようにする。
- 学級経営、学年経営上発生する問題についての解決の方策等、具体的な事について研究する。
- 問題の解決だけではなく、より望ましい集団作りへ向けた指導方法の研究に努める。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

活力ある学校作りに必要な学年組織の活性化のために、

- ① 学年会を月2回設定して、学年職員の意志の疎通を図る。
- ② 指導方法の研究のために、各自が自分で設定したレポートを持ち寄り、それを中心とした話し合いを行う。
をねらいとして、研究を進める。

(2) 研究主題設定理由

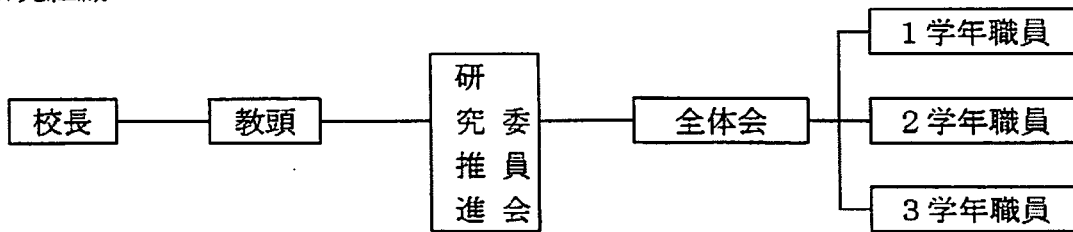
学校は、集団生活が特徴である。一人では出来ない事も、みんなで頑張れば出来る。この方法が日本の学校では大きな効果を上げてきた。ところが、ともするとこのようなお互いを高め合う集団にならずに、いじめなどに見られるマイナス傾向の強い集団が出来がちである。

このような現状を打開するために大切なものは、教職員集団の地に足のついた継続的な粘り強い指導である。学年職員の統一的な指導のために重要な事は、話し合う時間を確保する事である。もちろん日常的にも夕方などに集まり学年会を行う事は可能ではあるが、放課後に設定してあると確実に話し合いの時間を増やせる。

とはいえ、日常的に起こる様々な問題を解決するだけでは、処理をしているだけで指導をしているわけではない。指導に向けた話し合いの具体的な材料として、レポートを作る事にした。学年経営、学級経営、給食指導等、各自が自分の日常考えられる問題についての考察を深めるために、レポートを作るわけである。文字にするためには、自分の考えが具体的にならねば出来ない。レポートを作る事で自分の考えを深め、それについての話し合いを持つ事で、学年職員の資質の向上をはかるのがねらいである。

またこの学校研究によって、肝心の生徒と触れあう時間が減っては元も子もないので、あくまでも日常生活の中で研究を進める事に留意した。

(3) 研究組織



2 研究の内容

6月 5日 (木)	職員会議 学校研究の進め方の提案及びその了承 ・毎月の学年会でレポート発表を行う事 ・そのレポートを集めて、全体研修を行う事等
6月26日 (木)	学年会議 (第1回) ・学年主任…学年経営上の課題について
10月16日 (木)	学年会議 (第2回) ・担任…学級の組織作りとその実際の動きについて ・担任…体育祭、合唱祭等の行事の取組を通した学級経営について
12月 8日 (月)	学年会議 (第3回) ・担任…学級経営の成果と課題 ・副担任…自らの学年との関わりを通しての成果と課題 (授業、公務分掌等)
1月29日 (木)	全体会 (予定) ・各学年主任からの研修内容の報告及び学校長のまとめ
2月	まとめの冊子作りと配布

3 実践事例

(1) 第1回学年会

- ① 1年主任…「学年学級経営の充実を目指して」 ・自治能力を高める班活動の充実をはかるためには何が大切か、またなぜこれが必要なのか ・生徒集団のとらえ方について
- ② 1年担任…「班活動について」 ・自分のクラスで行ってきた班活動の実際の流れとその意義について発表した。 ・自分の学級経営の考え方について ・個人と全体の関係について、全体の雰囲気は個人の動きを規定する事について
- ③ 2年主任…「学年内におけるいじめ問題とその対応」 ・昨年度発生したいじめに関する問題、および今年度予想される問題について。 ・実践事例を挙げながら、対処方法について共通理解をはかった。

- ④ 3年主任…「集団行動と集団活動について」 ・最上級生にふさわしい集団行動のあり方について ・学年の集団活動を作り上げるための、組織の持ち方やその活動内容について ・学年職員の日常の役割分担と動きの確認について

(2) 第2回学年会

- ① 1年担任…「学級経営の成果と課題」 ・学級経営と道徳の連携、掲示物の充実、生活リズムの定着についての観点から発表した。 ・前半の生活を通してのクラスの様子について ・今後の課題として学級委員と班長の成長が必要と発表した。
- ② 1年担任…「人権学習（アサーショントレーニング）」 ・自分が今年度担当している人権学習を題材として、授業研究の内容についての検討を学年で行いながら、学年の現状について話し合った。 ・クラスの生徒の様子について
- ③ 2年担任…「学級内におけるいじめ問題とその対応」 ・前半の生活の様子と発生したいじめの処理について発表した。 ・今後の改善に向けて取り組むこと
- ④ 2年担任…「学級内におけるいじめ問題とその対応」 ・1学期に発生したいじめについて発表した。 ・その後の指導及び現在継続して取り組んでいることについて発表、学年内の共通理解を図った。 ・それについての学年職員の役割分担を確認
- ⑤ 3年担任…「進路指導・キャリア教育について」 ・今年度の進路指導上考えられる問題点について発表。 ・実際予想されるケースを挙げながら、学年の共通理解を図った。 ・1年間の進路指導の流れについて
- ⑥ 3年担任…「清掃について」 ・清掃の取組の現状について ・その改善点について ・清掃分担と班の配置の再編成について ・望ましい清掃活動の啓発について

(3) 第3回学年会

- ① 1年担任…「学級経営の反省」 ・1, 2学期を通しての学級経営の反省点について ・今後の改善点について ・改善に向けて班活動の活用方法について、定期的に班長会議を持つこと、その中からクラスの様子を把握することなど
- ② 1年副担任…「生徒が主体的に取り組む音楽授業の研究（学習規律の確立を目指して）」 ・パートリーダーの役割を明確にすることで、生徒の主体性を引き出すことについて ・今後の課題について、それでもなかなか取り組まない生徒をどのように指導するかなど
- ③ 2年担任…「学年としての生徒指導の取り組み」 ・学年内の生徒指導上の問題点の把握 ・その解決に向けた学年職員の取り組みについて及び今後具体的に取り組むことの確認 ・組織的に取り組む生徒指導について

- ④ 2年副担任…「心の教育としての美術教育」 ・担当教科を通しての2年生の様子について ・授業の中で自分の心を開かせる方法について、またその教材について ・具体的な実践事例と授業の展開例について
- ⑤ 3年担任…「提出物の徹底に向けて」 ・クラスの生徒の様子と進路に向けての動きの報告 ・提出物の徹底のために工夫している朝の会、帰りの会について ・その成果とクラスの毎日の生活で変わったこと ・今後の課題について
- ⑥ 3年副担任…「給食指導について」 ・給食の問題点について、配膳方法 ・片付け方の確認、時間の徹底について ・給食委員会を活用する給食指導について ・各クラスの給食時の班活動について

4 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

- ① 学年会を月2回設定した事で、学年職員どうし落ちついて話し合う時間が増え、学年の動き、学年の生徒理解について共通理解を図ることが出来た。従来はテーマ別に全体研修の形をとっていたが、とかく形式的なものになりがちであった。それに比べて、学年会ではどの学年も具体的な話題となり、学校の活性化に向けて有効に活用することが出来た。
- ② 会議の回数を増やしても、単に雑談の時間で終わってしまっただけは何もならない。そう言った意味で、レポートを作ることは非常に有意義であった。まず、書くという作業は、自分の考えをまとめるために有効である。何となく思うことはあっても、いざ文章にまとめようとするとなかなかうまくまとまらない。それを推敲していく過程で、自分の考えをはっきりすることが出来る。
- ③ そしてもう一つ大きかったのが、レポートを作ることで、いつもの日常の内容(処理)から一歩抜けて、どのように学年を持って行くかという「指導」の内容について話す時間を持てたことである。忙しさのため我々の話し合いは、とかく処理に追われがちである。本来はどの様にもっていくかという部分に、時間を割かねばならないわけである。

(2) 今後の課題

- ① 当初の計画では、研究の学年会を5回予定し、だいたい1回につき1人ずつの発表で、各学年話し合いを持つ予定だった。ところが7月下旬に予定していたものは学期末の作業時間確保のために流れ、9月下旬に予定していたものは体育祭の延期で流れ、結局3回しかできなかつた。そのため、1回につき2人ずつの発表とせざるを得ず、時間不足からせつかくのレポートの研究を深めることが充分に出来なかつた。時間の確保が大きな課題である。
- ② 今年度は、レポートの内容を個人に任せため、全体としてのまとまりを欠いたように思う。次年度は、全体のテーマを受けて系統立った内容を設定し、それを分担していくことが必要なのではないかと思われる。